MACHIDA CITY MUSEUM OF GRAPHIC ARTS BULLETIN No.27

[Essay]

TAKANO Shiori
Jean-Émile Laboureur's Writings on Printmaking
The Engraving Revival and Print Popularization Activities in Interwar France ——— 3

[Research Note]

MACHIMURA Haruka
The Biography of ZHAO Ruijuan, and the History of Japan-China Printmaking Exchange by Overseas Chinese in Kobe
From New Acquisition Works in 2023 ——— 14

[Annual Report]

Catalogue of New Acquisitions ——— 19
Exhibitions ——— 29
Loans ——— 34
List of Educational Activities ——— 38

町田市立国際版画美術館 紀要 第27号

［小論］

高野 詩織
ジャン=エミール・ラブルールの版画論
戦間期フランスにおけるエングレーヴィング・リバイバルと版画の普及活動 ——— 3

［研究ノート］

町村悠香
招瑞娟の歩みと神戸華僑が紡いだ日中版画交流史
2023年度新規収蔵作品から ——— 14

［活動報告］

2022年度　新収蔵作品 ——— 19
2022年度　展覧会の記録 ——— 29
2022年度　収蔵品貸出記録 ——— 34
2022年度　普及事業 ——— 38

町田市立国際版画美術館 紀要

第27号

ジャン=エミール・ラブルールの版画論

戦間期フランスにおけるエングレーヴィング・リバイバルと版画の普及活動

高野 詩織

1．はじめに

ジャン＝エミール・ラブルール(Jean-Émile Laboureur, 1877-1943)は、ジョルジュ・バルビエ(George Barbier, 1882-1932)らとともに20世紀前半のフランスで活躍したイラストレーターであると同時に、板目木版やエングレーヴィングの技法を熟知した版画家だった。第一次世界大戦の戦地でエングレーヴィングを制作し始めたラブルールは、戦間期の版画壇で注目を集め、西洋版画史や「オリジナル版画(gravure originale)」[1]に関する複数の論考を著した。さらに1923年にはフォーヴの画家ラウル・デュフィ(Raoul Dufy, 1877-1953)と共に「独立版画家協会(Société des peintres-graveurs indépendants)」を組織し、絵画の複製技術ではなく芸術的な表現手法として版画の地位向上を目指した。

海野弘が1982年に『三彩』の連載記事で紹介して以来[2]、ラブルールの作品は日本でも知られるようになり、2012年から翌年にかけて「鹿島茂コレクション２　バルビエ×ラブルール―アール・デコ、色彩と線描のイラストレーション」展が練馬区立美術館と群馬県立館林美術館を巡回した。ここで光が当てられたのは主にアール・デコ期の風俗やモダンな女性像を軽やかに描出した挿絵本の仕事で、版画の普及活動については晩年の取り組みとして補足的に説明されるに留まっている。

フランスでは2010年代以降ラブルールの再評価が進み、生誕地ナントで「ジャン=エミール・ラブルール：大戦のイメージ」展[3]、1919-24年に居を構えたル・クロワジックで「ジャン=エミール・ラブルール：大地と海の狭間、半島で刻まれたハーモニー」展が相次いで開催された[4]。こうした展覧会を通して、ラブルールの版画家としての側面が見直されるようになったが、彼の版画論や国内外での講演活動、展覧会の組織など調査すべき事項は数多く残されている。そこで本稿では、エングレーヴィング・リバイバルと「オリジナル版画」に関わるラブルールの版画論とそこから派生した展覧会に着目し、彼の版画史における位置付けを探る。

2．ラブルールの版画学習：ベル・エポックの版画界

本題に入る前に、ラブルールが多種多様な版画技法を習得した経緯を辿り、19世紀末から20世紀初頭までの版画界の動向について整理したい。

ラブルールは1877年、ブルターニュ半島の南東部に位置する都市ナントで裕福なブルジョワ家庭に生まれた。勉学に励む傍らでデッサンの才能を早くから示した彼は、両親の友人で版画収集家のアルフォンス・ロッツ=ブリソノー(Alphonse Lotz-Brissonneau, 1840-1921)から激励を受け芸術家を志すようになった。1895年に法学と文学を学ぶためにパリに出たラブルールは、ほどなく私立美術学校アカデミー・ジュリアンで絵画を学びはじめ、モンマルトルやモンパルナスに集う同世代の芸術家たちと交友を深めた。

ラブルールの息子シルヴァンが編纂したカタログ・レゾネによると、彼は生涯で791点の版画を手がけており、そのうち543点が銅版画、208点が木版画、そして40点がリトグラフであった[5]。このうちラブルールが最も早い時期に取り組んだのは木版画である。ラブルールが制作した木版画の大部分は、1880年代から20世紀初頭にかけて数多くの版画家が取り組むようになった板目木版であった。板目木版は、年輪に対して垂直に切り出した木材を用いる技法で、かつては盛んに制作されていたが、細密な表現が難しいため長らく廃れていた。他方で、年輪を水平に切り出す木口木版は目が詰まっているため繊細な版刻も可能だったが、新聞等のメディアに用いられることが主で、芸術的表現だとは見なされてこなかった。

木版画が芸術的な表現手法として注目されるようになったのは、ジャポニスムが流行した19世紀後半である。ラブルールはパリに出て間もない時期に、ロッツ=ブリソノーの紹介で同郷の版画家オーギュスト・ルペール(Auguste Lepère, 1849-1918)の知遇を得て、彼から板目木版の技法を学んだ。当時のルペールは、浮世絵風の繊細な多色刷木版画から離れ、ポール・ゴーガン(Paul Gauguin, 1848-1903)、エミール・ベ

ルナール(Émile Bernard, 1868-1941)、フェリックス・ヴァロットン(Félix Edouard Vallotton, 1865-1925)らと共に、太い縁取り線によるプリミティブな表現を試みるようになっていた。ラブルールはこうした黒と白のコントラストによる力強い造形表現を学び、早くも1898年のサロンで探究の成果を披露している。1900年に版刻した《通り過ぎていく連隊》【図1】は、ラブルールの初期木版画のひとつで、現代的な主題と簡潔な構図はヴァロットンの影響を強く感じさせる。

世紀転換期のパリで活動していたラブルールにとって、街角を彩るリトグラフのポスターは日常で目にする身近な印刷物だった。ラブルールは1897年頃に、母方の従兄で版画家のジュール・グランジュアン(Jules Grandjouan, 1875-1968)らを介して、アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック(Henri de Toulouse-Lautrec, 1864-1901)と出会い、エドゥアール・アンクール(Edouard Ancourt, 1841-?)の印刷所でリトグラフの制作方法を直接教わった。後年にラブルールは、トゥールーズ=ロートレックに親しみを覚えて印刷所を頻繁に訪ねたと回想しているが[6]、リトグラフの技法には馴染めなかったようで木版画と銅版画に比べて作例は希少である。鹿島茂が指摘するように、ラブルールがトゥールーズ=ロートレックから学び取ったのは、版画の技術というよりはむしろ「現代生活の中に一瞬現れてはまたすぐに消えてしまう瞬間のポエジーを感覚的にとらえる方法」[7]であった。実際、ラブルールの作品に現れるパリの賑わう街並みや、最新のファッションに身を包む女性といった現代的な主題は両者の作品に通じている。

またラブルールは、早くから板目木版と並行してエッチングにも取り組んでいる。防蝕剤を塗布した銅版にニードルで描画するエッチングは、絵画や素描のように作者の手の動きを活かした即興的な表現が可能であることから19世紀半ばから芸術的な表現手法として見直されるようになった[8]。ラブルールのエッチングの師は明らかになっていないが、ロッツ=ブリソノーを介してフェリックス・ブラックモン(Félix Bracquemond, 1833-1914)ら優れた版画家に出会い、版画家のコミュニティに関わっていたと推察される[9]。

こうした同時代の版画家たちの作品に加えて、ラブルールに影響を与えたのは、パリやその他の都市の版画収集室で目にしたオールドマスターの銅版画だった。1898-99年の兵役を機にパリを離れたラブルールは、ドイツ語学習のためにドレスデン、ベルリン、カッセル、フランクフルト、ミュンヘンといった都市を旅してまわった。特にドレスデンでは、1720年に開館した版画素描室(Kupferstich-Kabinett)に通い、ヨーロッパ最大級の版画美術館で古版画の名品を実見する機会を得た。【図2】はドレスデン滞在時に制作されたエッチングである。後年になってラブルールはレンブラント・ファン・レイン(Rembrandt van Rijn, 1606-1669)のエッチングを賞賛しているが、古版画への敬意は、この時代に培われたものだろう。

このように1914年の第一次世界大戦勃発までにラブルールは、ルペール、トゥールーズ=ロートレックら同時代の主要な版画家から技法を学び、古版画について学ぶ機会も得ていた。ラブルールはそうした自らの経験を活かして次第にフランスの版画界における中心人物となり、講演会や著述活動

【図1】ジャン=エミール・ラブルール
《通り過ぎていく連隊(Le Régiment qui passe)》
1900年(1919年の刷り)、227×299mm、木版、当館蔵、JEL605

【図2】ジャン=エミール・ラブルール
《ドレスデンの街路(Une Rue à Dresde)》
1899年、114×184mm、エッチング、当館蔵、JEL26

や展覧会を通じて版画の普及活動にも尽力していくことになる。

3．戦間期フランスにおける エングレーヴィング・リバイバル

版画史の概説書においてラブルールの名は、古典技法であるエングレーヴィングに戦間期に取り組んだ人物としてしばしば登場する[10]。銅版画のなかでも最も古い歴史を持つエングレーヴィングは、ビュランと呼ばれる専用の道具で銅版に直接線刻する高度な技法である。肖像画や歴史画の高精細な複製技術として重宝され、フランスの王立絵画彫刻アカデミーでも特別な地位を確立していたが、19世紀前半のリトグラフの普及や1880年代の写真印刷の実用化に伴って需要を失い、作例も減少していた。

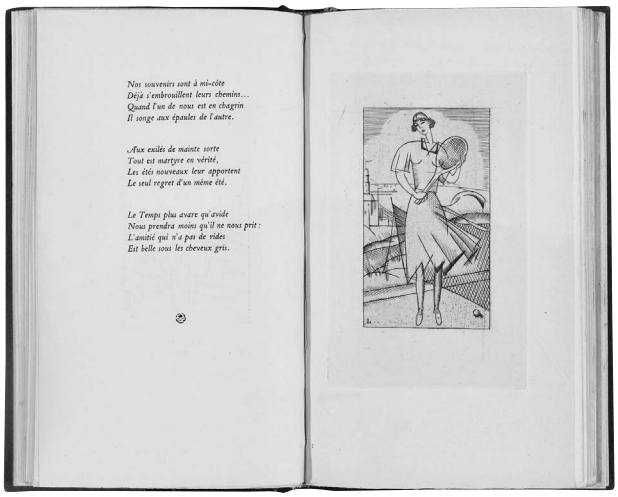
このような時にあってラブルールがエングレーヴィングを制作した背景には、戦中の物資不足があった。アメリカでの滞在歴があり英語が堪能だったラブルールは、通訳者としてイギリス軍に従軍し、1916年からフランス北部アルトワに滞在した。英仏連合軍とドイツ軍が激しい戦闘を繰り広げた西部戦線を転々とする中でもラブルールは粘り強く創作活動を続け、エッチング用の腐食液を入手できなくなると、銅板とビュランだけで制作できるエングレーヴィングに取り組むようになった。さらに銅板が入手できなくなると、ラブルールは手近にあった砲弾の梱包箱や薬莢（やっきょう）をも版材にした[11]。《アンクル川沿いの野営》【図３】は、真鍮製の梱包箱を板状に伸ばして再利用した作品のひとつで、兵士たちの足元には版材のもととなった物資を想起させる円柱や立方体のモティーフがキュビスム風の鋭い直線で刻まれている。

ラブルールが西部戦線で制作したエングレーヴィングは残念ながら当館に所蔵されていないが、大西洋岸の港町サン・ナゼールでアメリカ軍の通訳をした1917年頃の作品《前線の小さな売り子たち》【図４】は収められている。デフォルメされた軍人や売り子、その周囲に広がる街並みは弾むような曲線で伸びやかに表されているが、簡潔で明瞭な線刻や部分的に施されたクロス・ハッチングの陰影は、エングレーヴィングの特徴を活かした表現である。

第一次世界大戦が終結した1919年、ラブルールは詩人ロジェ・アラール（Roger Allard, 1885-1961）の韻文詩『少女たちのアパルトマン』にエングレーヴィングの挿絵を提供した【図５】。本書はラブルールが初めて手がけた挿絵本で[12]、６点の挿絵にはテニスや水泳に興じるファッショナブルな女性たちが登場する。「エッチングはガス灯のぼんやりしたうす暗さをあらわし、グラヴュール・オー・ビュラン〔エングレーヴィング〕は電気のまぶしい明るさをあらわしている」と海野が評したように[13]、ラブルールのエングレーヴィングは、アール・デコ期のモダン都市のイメージと調和し、愛書家から人気を集めるようになった[14]。

1920年代のフランスでは、ラブルールの後に続くように複数の画家=版画家がエングレーヴィングを制作するようにな

【図３】ジャン=エミール・ラブルール《アンクル川沿いの野営（第２ステート）（Bivouac sur les bords de l'Ancre）》1916年、エングレーヴィング、167×193mm、フランス国立図書館（FOL-EF-465（４））、JEL164
Source gallica.bnf.fr / BnF



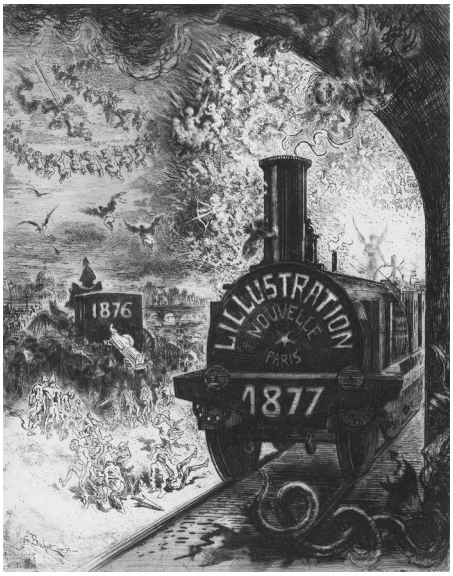
Nos souvenirs sont à mi-côte
Déjà s'embrouillent leurs chemins…
Quand l'un de nous est en chagrin
Il songe aux épaules de l'autre.

Aux exilés de mainte sorte
Tout est martyre en vérité,
Les êtés nouveaux leur apportent
Le seul regret d'un même été.

Le Temps plus avare qu'avide
Nous prendra moins qu'il ne nous prit :
L'amitié qui n'a pas de rides
Est belle sous les cheveux gris.

【図５】ロジェ・アラール著、ジャン=エミール・ラブルール画・刻『少女たちのアパルトマン（L'Appartement des jeunes filles）』より、1919年刊、当館蔵、JEL185

【図４】ジャン=エミール・ラブルール《前線の小さな売り子たち(Les Petits marchands du front)》
1917-21年?(1921年以降の刷り)、196×167mm、エングレーヴィング、当館蔵、JEL175



【図６】フェリックス・ビュオ『イリュストラシオン・ヌーヴェル（L'Illustration nouvelle）』より《第９巻扉》、1877年、エッチング、ドライポイント、アクアチント、347×268mm、当館蔵

【図６】部分拡大図

【図７】ルイ=ピエール・アンリケル=デュポン（刻）、イポリット・フランドラン（画）《デュシャテル伯爵（Comte Duchatel）》1863年、エングレーヴィング、470×360mm、当館蔵

った。そうした状況をエングレーヴィングの「リバイバル」と言い表したラブルールは、イギリスの工芸雑誌『ザ・ストゥディオ』誌1929年12月号に「フランスにおけるエングレーヴィングのリバイバルについて」と題するエッセイを寄せた[15]。本稿の冒頭でラブルールは、フェリックス・ビュオ（Félix Buhot, 1847-1898）が1877年に制作した「ビュランの埋葬」という異名を持つエッチング【図６】について言及し、1870年代から60年間、エングレーヴィングが版画界から葬られていたことを指摘する。本図の行き交う蒸気機関車と馬車は銅版画の新旧交代を表現したもので、前者はエッチング、後者はエングレーヴィングを象徴している。馬車の上空を舞う天使たちが天上へと運んでいるのはビュランである。ここでビュオは、エングレーヴィングが前時代的な技法であることを強調し、エッチングの現代性を示そうとしたのである。実際、ラブルールが指摘するように、ビュオら「ロマンティックなエッチングの先導者たち」が活躍していた時代は、アカデミックなエングレーヴィングの伝統を継承するルイ=ピエール・アンリケル＝デュポン（Louis-Pierre Henriquel-Dupont, 1797-1892）【図７】やフェルディナン・ガイヤール（Ferdinand Gaillard, 1834-1887）の晩期に重なっていた[16]。彼らの没後にはオランダのピーテル・デュポント（Pieter Dupont, 1870-1911）がアルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer, 1471-1528）を思わせる動物画や人物画を表したが【図８】、彼に続く版画家は現れなかったとラブルールは述べる[17]。

【図8】ピーテル・デュポント《農耕用の馬（Cheval de labour）》1902年、160×240mm、エングレーヴィング、オランダ王立美術館（RP-P-1904-172）

こうした空白の時代を経てラブルールは、エルベール・レスピナス（Herbert Lespinasse, 1884-1972）やデメトリウス・ガラニス（Demetrios Galanis, 1879-1966）といった同年代の画家=版画家たちともに1910年代半ばからエングレーヴィングによるオリジナル版画を制作し、古典技法を現代に蘇らせたのだと自負する。さらに彼らの取り組みは一過性のものに留まらず、戦間期にはヨーゼフ・ヘクト（Joseph Hecht/Józef Hecht, 1891-1951）、ピエール・デュブレイユ（Pierre Dubreuil, 1891-1970）、ジャン・デュラック（Jean Dulac, 1902-1968）ら次世代の画家=版画家もエングレーヴィ

ング制作に取り組むようになる[18]。特にヘクトは、「アトリエ17」を主宰してシュルレアリストたちに実験的な版画技法を伝えたスタンリー・ウィリアム・ヘイター（Stanley William Hayter, 1901-1988）の師であり、前衛的な銅版画の発展に大きく寄与した。

このように1920年代には、少なからぬ作家がエングレーヴィングに取り組むようになり、彼らの作品は他の前衛美術の展開にも関わっていった。「エングレーヴィング・リバイバル」は、エングレーヴィングの近代化と換言することもできる現象だった。

4.「独学のエングレーヴァー」の是非：クールボワンとラブルールの議論

エングレーヴァーとしての鍛錬を積んでいない「画家=版画家」によるエングレーヴィングの制作とその流行は、戦間期の版画界において必ずしも歓迎されるものではなかった。フランス国立図書館版画素描部門の司書で版画史家のフランソワ・クールボワン（François Courboin, 1865-1926）は、エングレーヴィングの新たな展開に難色を示したひとりである。

クールボワンが『アール・エ・デコラシオン』誌1921年10月号に寄せた「エングレーヴィング」は、熟練した技術によって絵画や肖像を精巧に版刻する「複製版画」の伝統について取り上げたテクストである[19]。ここでクールボワンは同時代の「オリジナル版画」の是非について触れていないものの、この２年前に発表した『少女たちのアパルトマン』で脚光を浴びたラブルールらの取り組みにも目配せしている。

まず本稿の冒頭でクールボワンは、ビュランを「誰もがその名を知り多くの人が話題にしていても、専門家を除くとほとんど誰も目にしたことがない」道具であるとし[20]、1767年刊行の『百科全書』をもとにビュランの構造や描刻法について詳しく解説する。その上でクールボワンは、18世紀の版画家シャルル=ニコラ・コシャン（Charles-Nicolas Cochin, 1715-1790）の著述を引用し、「ビュランの明瞭さ」だけをエングレーヴィングの評価基準だと考える版画家の作品は芸術性に欠けると述べ、「まず断片を仕上げようとする誘惑」を抑え、細部に拘泥せずに作品全体の調和を保つことが最も重要だと強調した[21]。

こうした「ビュランの明瞭さ」だけを重んじる版画家に対する批判は、本稿の最後にラブルールら同時代のエングレーヴァーに重ね合わされる。クールボワンは、エングレーヴィングが複製技術としての役割を終えた今、「我々がこれから見ることになるのはおそらく画家=版画家のエングレーヴィングであろう」と述べ、アカデミックな仕上げがなされていない「未完の作品」への関心の高まりは尤もなことだと認める[22]。他方で彼は、「天才ある者」の意図的な省略と「無能な者」の省略は区別しなければならないとも述べ、「独学のエングレーヴァー（buriniste autodidacte）」に疑いの目を向ける[23]。クールボワンが危惧したのは、独学のエングレーヴァーたちが「『前衛的な』板目木版のように、プリミティブの領域を超えた襲撃を試みる」ことであった[24]。クールボワンは、ビュランがあれば「ひどい困難にあっても最初の一振りで最大限のことができる」、つまり少ない道具と材料で描刻できるという画家=版画家の言葉を引用し[25]、こうした作品は昨今の複製版画における質の低下を助長させ、エングレーヴィングの危機的状態を長引かせるに過ぎないという見解を示したのだった。

クールボワンとラブルールは、1920年代に至るまでエングレーヴィングが閉塞状況に陥っていたという認識を共有している。ただし版画史を厳密に辿るならば、ビュオが「ビュランの埋葬」を発表した1870年代以降も、高度な版刻技術と画面の構成力を併せ持ったエングレーヴァーが活動を続けていたことは見逃せない。1882年から1922年にかけてパリでは「エングレーヴァー協会（Société des graveurs au burin）」が組織され、定期的な展覧会を開催していた。また1889年の第４回パリ万博ではフェリックス・ブラックモン、レオポルト・フラメング（Léopold Flameng, 1831-1911）、シャルル・ワルトネ（Charles Albert Waltner, 1846-1925）ら４人の版画家がエングレーヴィング部門の賞を獲得している[26]。クールボワンもこうした版画家たちについて1923年刊の『フランスの版画：その起源から1900年まで』で言及しており、特にフラメングの独創性を賞賛している[27]。こうした状況を鑑みるとエングレーヴィングの伝統はベル・エポックまで細々と続いていたことがわかるが、1920年代にクールボワンが優れた若手エングレーヴァーの名前を挙げることができなかったのもまた事実であった。

さて手近な道具と版材で描刻できるためビュランを使用し始めた「独学のエングレーヴァー」のひとりに他ならないラブルールにとって、クールボワンの版画観を是正することは重要な課題であった。クールボワンの論考が刊行されたわずか２か月後の1921年12月、ラブルールは『ラムール・ド・ラール』誌に「エングレーヴィングと伝統」と題した論考を寄

せ、権威ある理論家に公然と反論した[28]。クールボワンの著述を意識してか、ラブルールも冒頭でコシャンを引用し、厳密な規則を重んじるアカデミックなエングレーヴィング観を伝えた。コシャンにとってエングレーヴィングは中世の騎士物語に登場する貴婦人のように気高く、「彼女へと続く道は茨と棘だらけで、長く困難な道のりを歩まないとたどり着けない」ものだった[29]。そうした従来の認識を提示した上でラブルールは、「版画室の学識ある学芸員」が「独学のエングレーヴァー」による「襲撃」を不安視している現状について言及した[30]。

クールボワンの誤りを示すために、同稿でラブルールは彼と異なる見方でエングレーヴィングの歴史を遡ってみせる。ラブルールによると、保守的な論者が支持しているアカデミックなエングレーヴィングの技術は、あくまで絵画の色調などを再現するものであった[31]。実際、クールボワンは『アール・エ・デコラシオン』誌の論考で歴史画や肖像画の複製版画について論じているが、エングレーヴィングは必ずしも絵画を複製するための技法ではなく、17世紀の王立絵画彫刻アカデミーの創成より古い時代にも「オリジナル版画」の作例が残されている。このテクストでラブルールが具体的な作家として列挙したのは、粗削りで素朴な線刻が認められるジャン・デュヴェ（Jean Duvet, c. 1485-after 1561）【図９】とエティエンヌ・ドローヌ（Étienne Delaune, 1518/1519-1583）の名前である。手作業ではなく機械による絵の複製が可能になった20世紀初頭において、ラブルールはデュヴェらを端緒とする「『オリジナル版画』の偉大な伝統」を復活させる必要性を説き[32]、自らの作品を版画史のなかに正当に位置づけようとした。

最後にラブルールは、エングレーヴィングを「私たちの時代の傾向や関心事」を反映できる技術であると言い、「未完成」とも言われる素早い線の表現は、「自動車やあらゆる形態が持つスピードの世紀」である今世紀の特徴として理解すべきだと指摘した[33]。工業製品や機械を賛美した「マシン・エイジ」の美的感覚にエングレーヴィングの表現が通じているという興味深い指摘である。

５.「オリジナル版画」の地位向上：独立版画家協会の創設

ラブルールがエングレーヴィング・リバイバルについて述べた際にポイントとなったのは、彼らの作品が複製版画ではなく「オリジナル版画」であったということである。ラブルールは「オリジナル版画」の定義について、1926年の単著『オ

【図９】ジャン・デュヴェ《国王の尊厳（La Majesté Royale）》1547年頃、302×209mm、エングレーヴィング、メトロポリタン美術館蔵

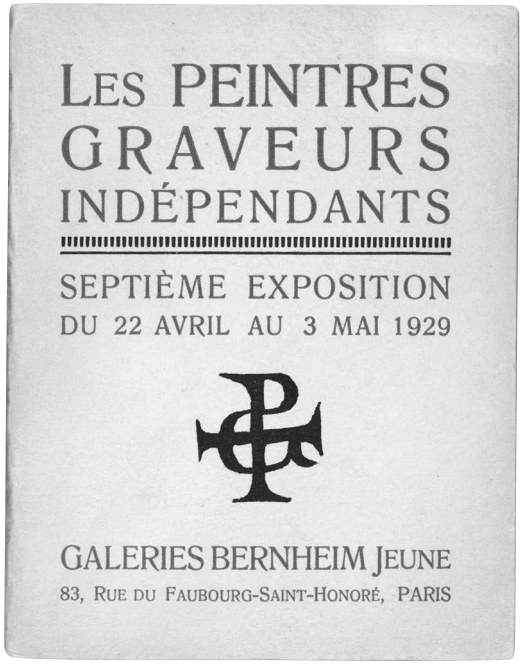
【図９】部分拡大図

リジナル版画についての考察』において「選択した技法を用い、その技法に特有の性格を活かした、版画家による直接的な表現」とした[34]。この定義は、「ひとりの芸術家によって全体が構成され、素描され、制作された版画」[35]という一般的な理解から一歩踏み込んだもので、自作の素描をそのまま版に写すだけでは不十分で、版画であることの必然性が求められた。ラブルールは、同一の作者による版画を「オリジナル版画」たらしめる要素として、木口木版なら「固有の色彩を持ち、エッチングのそれを模倣しようとしていないこと」、板目木版なら「古い民衆版画の粗削りな面が見出せること」、エングレーヴィングなら「紙の白地が果たす役割をそのまま残している表現」、そしてエッチングや他の銅版画は「素直で自由な表現」が見られることを挙げた[36]。

こうした「オリジナル版画」の高い表現性を示すために、ラブルールは論考の発表と同時期に、デュフィとともに「独立版画家協会(Société des Peintres-graveurs indépendants)」を組織した[37]。1923年に創設されたこの協会は、油彩画に比べて地位が低いと思われていた版画の価値を押し上げるというラブルールの問題意識が活動に繋がったものである。協会展の特徴は、同一作家の版画を油彩画や素描と一緒に展示し、それぞれの技法と同列に扱おうとした点にあった。当時フランスには、「フランス版画家協会(Société des peintres-graveurs française)」など既に複数の版画協会があったが、ラブルールはこうした協会と対立することなく、多種多様な版種に取り組む版画家たちを団結させることを目指した。著名な批評家クロード・ロジェ=マルクス(Claude Roger-Marx, 1888-1977)も本協会について「全ての新しい勢力を結集させ、その規模の大きさから、ある面では1862年〔に創設された腐蝕銅版画家協会〕と1890年〔に創設されたフランス版画家協会〕の勢いを思い起こさせる運動を創り出したいという願望」のもと組織されたと述べている[38]。

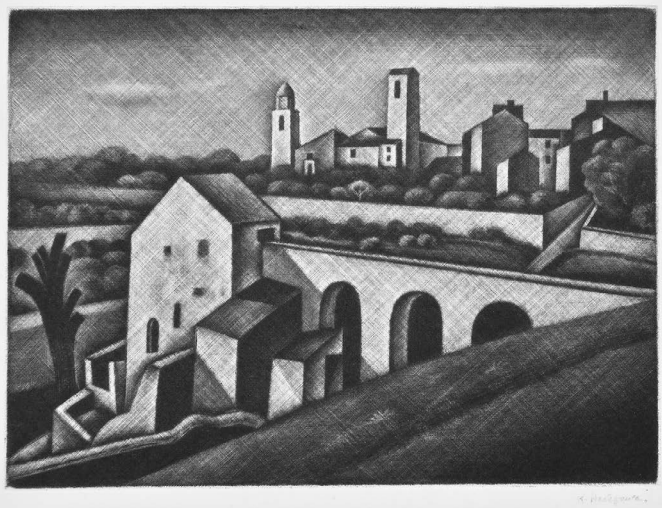
同協会は、1935年までパリのバルバザンジュ画廊やベルネーム・ジュヌ画廊などで年に1回のグループ展を開催した。出品目録にはアンリ・マティス(Henri Matisse, 1869-1954)、パブロ・ピカソ(Pablo Picasso, 1881-1973)ら名だたる芸術家と共に、マリー・ローランサン(Marie Laurencin, 1883-1956)、モーリス・ド・ヴラマンク(Maurice de Vlaminck, 1876-1958)、アンドレ・デュノワイエ・ド・スゴンザック(André Albert Marie Dunoyer de Segonzac, 1884-1974)ら戦間期のパリに集った画家=版画家らが名を連ねた。ローランサンとスゴンザックは、ラブルールから銅版画を教わった教え子でもある。このグループは国際色も豊かで、第一次世界大戦の終結後に渡仏して間もない長谷川潔(1891-1980)はデュフィの勧誘で1924年に入会し、1935年の解散まで毎年出品し続けた。

なお、町田市立国際版画美術館には、「独立版画家協会」に



【図10】「独立版画家協会　第7回展」目録、1929年刊、162×118mm、個人蔵

【図11】ラウル・デュフィ『フランスにおけるリトグラフの歴史に関する詩論』より、《水浴(Les Baigneuses)》1925年、リトグラフ、238×330mm、当館蔵



【図12】長谷川潔《カーネの水車小屋(Vieux Moulin (Le Cannet))》
1929年、マニエール・ノワール(メゾチント)、194×266mm、
当館蔵

【図13】ジャン・フレロー《ロクマリア村(Village de Locmaria)》
1937年、エッチング、159×218mm、当館蔵

加わった作家の作品が多数所蔵されている。デュフィの《水浴》【図11】、長谷川の《カーネの水車小屋》【図12】と挿絵本『竹取物語』は同協会展に出品された作品である。この他、19世紀末のロマンティックなエッチングを想起させるジャン・フレロー (Jean Frélaut, 1879-1954)【図13】も同協会のメンバーである。

このように錚々たる画家=版画家が名を連ねた「独立版画家協会」のインパクトは大きく、長谷川潔は、本協会展について「欧州第一次大戦後のフランス版画に大なる影響を与え、すでに名のある相当なフランスの画家でさえ、この協会展への出品は容易なことではなかった」と回想し、サロンよりもこの協会展の版画に力を注いでいた[39]。また鹿島は、「現在オークションで高値を呼んでいる20世紀巨匠の名作版画の多くはこの展覧会に出品されたものといっても決して言いすぎではない」と、コレクターの見地から本協会の影響力を推し量った[40]。本協会の活動については不明点も多く、展覧会の再構成や展覧会評の分析等の課題が多く残されているが、ラブルールが理論だけでなく実践においても版画の地位向上を目指した重要な活動として、さらなる調査が求められるだろう。

6. おわりに

本稿では、戦間期におけるラブルールの活動について、エングレーヴィングの制作、「オリジナル版画」の地位向上、展覧会活動の3点から考察した。それによって浮かびあがったのは、版画技法とその歴史に関する確かな知識を有しながらも、版画のモダニズムを追求したラブルールの姿である。こうしたラブルールの功績は戦間期のフランスでも次第に認められ、1937年の第5回パリ万博(現代生活における芸術と技術の国際博覧会)で彼は、書籍と版画部門の副委員長として講演や出品作の講評にあたった。またラブルールが万博会場を題材に制作した作品の原版はルーヴル美術館のカルコグラフィー工房にも収められている。「スペイン館」にピカソの《ゲルニカ》(レイナ・ソフィア美術センター蔵)、「光と電気館」にデュフィの《電気の精》(パリ市立近代美術館蔵)が飾られたこの年の万博において、ラブルールも国を代表する版画家として重要な地位に就いていたのである。

万博翌年の1938年に脳卒中で倒れたラブルールは版画界の第一線を退き、第二次世界大戦の終戦を待たずして1943年にブルターニュ半島のケヌファレで逝去した。戦後の抽象芸術の展開に立ち会うことなく、エングレーヴァーの「正統」な系譜に名を連ねることもなかったラブルールは、美術史という学問領域において大きな注目は集めなかった。それでもラブルールの軽やかな線刻は、戦間期という短い時代に展開した版画のモダニズムをめぐる活動の痕跡でもあったといえるのだ。

(たかの・しおり　町田市立国際版画美術館学芸員)

註

1　一般に「オリジナル版画」は、ひとりの版画家が下絵の制作から刷りまでを手がけた版画だとされるが、ラブルールは「選択した技法を用い、その技法に特有の性格を活かした、版画家による直接的な表現」と定義している。詳細は本論文９-10頁を参照。

2　海野弘「一九二〇年代の画家たち-３-線刻の街　ジャン・エミール・ラブルール」『三彩』第417号、三彩社、1982年６月、91-96頁（再録：『一九二〇年代の画家たち』新潮社、1985年。）

3　Jean-Émile Laboureur : images de la Grande Guerre, Nantes, Musée d'histoire de Nantes, 17 January-26 April 2015.

4　Jean-Émile Laboureur : entre terre et mer, harmonies gravées en presqu'île, Le Croisic, l'Ancienne criée, 29 June-9 September 2018.

5　Sylvain Laboureur, *Catalogue complet de l'œuvre de Jean-Émile Laboureur*, 4 vols, Neuchâtel, Editions Ides et Calendes, 1998.
以下、JELと略記し作品番号を記す。

6　Marcel Valotaire(ed.), *Les Artistes du livre, Laboureur*, no. 4, Paris, Henry Babou, p. 13.

7　鹿島茂（著）、小野寛子（編）『鹿島茂コレクション２　バルビエ×ラブルール―アール・デコ、色彩と線描のイラストレーション』求龍堂、2012年、33頁。

8　19世紀半ばのエッチング・リバイバルについては下記を参照。『腐蝕銅版画家協会―フランス19世紀のエッチング』町田市立国際版画美術館、1992年。

9　*J.-E. Laboureur, estampes dessins livres illustrés*, exh, cat., Paris, Bibliothèque nationale, March-April 1954, n.p.

10　J・アデマール、M・バルバン、M・ムロ、Fr・ボルトレット、R.-A・ヴェジェール、Fr.ヴォワマン（著）、幸田礼雅（訳）『版画』白水社、1986年、136頁。

11　*Jean-Émile Laboureur : images de la Grande Guerre*, cat. exh. Nantes, Musée d'histoire de Nantes, 2015, p. 55.

12　ラブルールは『フランドルのイギリス派遣軍（Dans les Flandres britanniques）』（1916年刊）にも挿絵を提供しているが、本作は写真製版による印刷物である。そのため先行研究においては『少女たちのアパルトマン』が最初の挿絵本だと見なされている。
鹿島茂、前掲書、36頁。

13　海野弘「ジャン=エミール・ラブルール　アール・デコの風俗画家」『ジャン=エミール・ラブルール展』ギャラリー・アバンギャルド、1989年、２-８頁、６頁。
以下、〔 〕内は全て引用者による補足。

14　Marcel Valotaire(ed.), *op. cit.*, p.25.

15　Jean-Émile Laboureur, “The Revival of the burin in France”, *The Studio*, London, National Magazine Co., no. 441, December 1929, pp. 881-884.

16　Ibid., p. 881.

17　Ibid., p. 882.
この他にも19世紀末から20世紀初頭にかけてオランダでは、古典的な銅版画技法を用いた興味深い作品が残されている。ピーテル・デュポントは20世紀初頭にパリで制作を行っていたため、青年期のラブルールと関わりを持っていた可能性もある。
Emmanuel Bénézit, Jacques Busse(dir.), *Dictionnaire des peintres, sculpteurs, dessinateurs et graveurs*, 14 vols, 4 vol, Gründ, Hilmarton Manor Press, 1999(1976), p. 882.

18　Jean-Émile Laboureur, op. cit., p. 882.

19　François Courboin, “La Gravure au burin”, *Art et décoration*, Paris, Librairie centrale des Beaux Arts, 1921, pp. 113-124.

20　Ibid., p.118.

21　Ibid.

22　Ibid., p.124.

23　Ibid.

24　Ibid.

25　ここでクールボワンが引用したテクストは現時点で特定できていない。

26　Stephen Bann, *Parallel Lines: Printmakers, Painters, and Photographers in Nineteenth-Century France*, New Haven & London, Yale University Press, 2001, p. 169.

27　François Courboin, *La Gravure en France : des origines à 1900*, Paris, Librairie Delagrave, 1923.

28　Jean-Émile Laboureur, “La Gravure au burin et la tradition”, Louis Vauxcelles(ed.), *L'Amour de l'art*, Paris, Librairie de France, December 1921, Paris, pp. 395-397.

29　Ibid., p. 395.

30　Ibid.

31　Ibid.

32　Ibid., p. 396.

33　Ibid., p. 397.

34　Jean-Émile Laboureur, *Considérations sur la gravure originale*, Bruxelles, 1928, p. 11.

35　*Ibid.*, p. 5.

36　*Ibid.*, p. 11.

37　ポール・ゴーガンやドイツ表現主義の力強い木版画に魅せられたデュフィは、1910年代から精力的に木版画を制作した。ロジェ・アラールは『ル・ヌーヴォー・スペクタテュール』誌において「木版画の復活において、かなりの部分をラウル・デュフィ氏に負っていることは誰もが知っている」と綴った。
Roger Allard(dir.), *Le Nouveau spectateur*, no. 8, 25 August–10 Semptember 1919, p. 179.

38　Claude Roger-Marx, *La gravure originale en France de Manet à nos jours*, Paris, Éditions Hypérion, 1939, p. 67.

39　長谷川潔「ラウール・デュフィの追想」『みずゑ』第580号、美術出版社、1953年12月、14-25頁（再録：『白昼に神を視る』白水社、1982年、49-56頁、50頁。）

40　鹿島茂、前掲書、39頁。

［研究ノート］

招瑞娟の歩みと神戸華僑が紡いだ日中版画交流史―2023年度新規収蔵作品から

町村 悠香

はじめに

当館では2023年度に招瑞娟（ZHAO Ruijuan 1924-2020）の作品26点と夫の詹永年（ZHAN Yongnian 1926-）の作品１点の寄贈を受け入れた。招瑞娟は神戸を拠点に版画家として活動した華僑の女性である。筆者が招に関心をもったのは「彫刻刀が刻む戦後日本　２つの民衆版画運動」展（2022年４月-７月）の調査がきっかけだった。この展覧会では魯迅が提唱した中国の木刻運動の影響で、戦後版画運動と教育版画運動という２つの民衆版画運動が展開したことを紹介した。展覧会１章では神戸華僑が戦後の中国木刻普及の一翼を担ったことを示した。招瑞娟は中心にいた李平凡（LI Pingfang 1922-2011）と神戸中華同文学校の同僚だった。招は李平凡の影響で木版画を始め、1950年に李が帰国した後も日本で版画制作を続け、特に社会的なテーマを追求した。

招の作品を初めてまとまって鑑賞できたのは「神戸華僑女流版画家　招瑞娟遺作展」（主催・会場：神戸華僑歴史博物館、詹永年協賛、2022年１月-２月）だった。「彫刻刀が刻む戦後日本」展の開催直前だったため、展示には当館収蔵品以外は招瑞娟の作品を組み込めなかった。その後、詹永年氏から寄贈申出をいただき収蔵にいたった[1]。

日本に限らずアジア各地へ木刻が伝播した際に、華僑のネットワークやコミュニティが大きな役割を果たした[2]。日中を跨いでトランスナショナルに活動した李平凡と、神戸の華僑コミュニティに属した招瑞娟の活動は、日本における木刻の広がりを東アジア的視点から見る一助となる。また、戦後の多くの美術運動と同様に戦後の民衆版画運動も男性が主体で女性はマイノリティだったため、招はこの運動に関わった数少ない女性作家の一人だった[3]。

こうした立ち位置にあった招瑞娟の活動に着目することで、これまでにない視点から戦後の版画史を考察できる意義があると考え、本稿でその経歴を記す。招の画業は『招瑞娟版画集』（監修：高橋亨、構成・発行：詹永年、1984年）にまとまっている。経歴は画集をもとに関連文献[4]や詹氏へのインタビューを参考に補足し、今回収蔵した作品にも言及する。

木刻との出会い

招瑞娟は1924年に貿易商の父のもとに、８人姉妹の長女として広東省に生まれた[5]。1927年、３歳の時に父の事業のため来日、1930年に神戸華僑同文学校小学部に入学し、1936年に初等中学に進学した。1937年の盧溝橋事件で、日中は本格的な交戦状態となった。華僑の多くが帰国し教員が不足したため、神戸華僑同文学校は休校した。そのため、1939年にキリスト教系の頌栄保育選考学校に入学し幼児教育を学んだ。招にとって初めて日本語で教育を受ける機会となり、この頃から絵に興味を持ち始めた。1941年に卒業後、神戸中華同文学校附属幼稚園に教員として就職した[6]。

1940年代初頭に天津出身の李平凡が来日した[7]。李平凡は木刻運動の影響を受け、版画制作をしていた。神戸中華同文学校で美術を教えはじめると、神戸新集体版画協会を結成し木刻を普及した。招も協会に加わり版画を制作し始めた。

李平凡、招瑞娟、藍蔚邦は1943年11月に版画集『浮萍集木刻版画』（【図１】当館蔵・小野忠重旧蔵）を制作した。「浮萍」は浮き草を意味し、戦争中の不安定な状況下で招瑞娟の叔父・藍蔚邦が帰国することになり、記念に版画集を作ったと後書きにある[8]。

戦時中は華僑に対して特高警察の監視があった。木刻を普及する李平凡は左派的であると当局に厳しくマークされ、行動を制限され、『浮萍集』の多くは押収された。当館の小野忠重コレクションにある一冊は、押収前に小野に送られたと思われる貴重な作品である。この版画集に収まっている招の作品は、線を主体とする中国木刻のスタイルから強く影響を受けている。人物の息と工場の煙突から出る煙の刻線が交じり合い、象徴的な模様をかたちづくっている。

終戦と東京美術学校入学

1945年６月５日の空襲で神戸中心部はほぼ焼失した。神戸中華同文学校など華僑関係の施設も失われ、招も含め多くが自宅から焼け出された。学校は1946年６月に復興の目処が立

ち、９月から授業が再開した。授業は焼失を免れた兵庫区の大開小学校の校舎を間借りして開き、学校関係者は学校に住む者も多かった[9]。

1946年にはGHQの戦後の制度改革により、女性も東京美術学校に入学できるようになった。詹永年と招瑞娟の父親たちは神戸中華同文学校の経営に携わっており、学校再建を進めていた只中にあって、２人は家族の反対を押し切って上京した。同年５月15日に東京美術学校油画科に「特別学生」という留学生枠で入学している[10]。当初は版画を学びたいと思い入学したが、版画科がなかったため油画科に入った。安井曽太郎教室に所属し硲伊之助にデッサンを学んだ。

木刻普及との関わり、３足の草鞋を履いて

李平凡は神戸で1945年９月に日本華僑新集体版画協会を結成し、木刻普及を再開した。1947年２月に協会が神戸で中国木刻展を開き、同時期に東京でも中日文化研究所を中心に木刻を紹介する動きが起こる。

日中版画交流が盛り上がるなか、1947年７月16日に「日中版画懇親会」が東京で開催された。戦後日本で初めて開催されたとされる日中の版画家の交流会で、当時美術出版社に勤めていた小野忠重が呼びかけ、同社で開催された。招はこの会にほぼ唯一の女性として参加した。

招と詹は1948年に結婚。その後娘が誕生し、教員不足から両親に呼び戻され、1948年か遅くとも1951年には神戸に戻り、以後は晩年まで神戸に住んだ[11]。1952年に多くの画家が湊川神社の拝殿天井絵を献納した際に招も参加した。この時棟方志功も献納に加わり、その縁で日本板画院に所属した。

招は神戸に戻った後は神戸中華同文学校の美術教員を務め、教職、母親、そして版画家という３足の草鞋をはく生活を送った。教え子によると授業で制作した版画は『三国志』など、歴史教育と結びついたテーマもあったという[12]。大田耕士が主導した日本教育版画協会に所属し、機関誌『はんが』No.65（1958年11月）には、招が指導した生徒の作品が表紙に掲載されている。

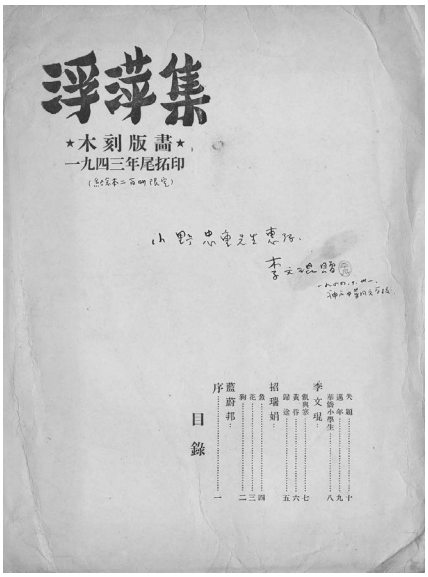
第五福竜丸事件と女性による平和運動

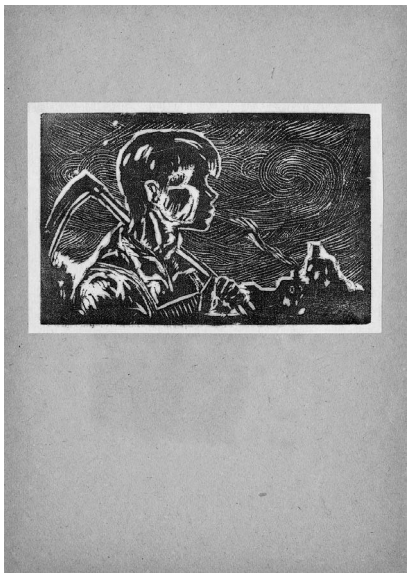
招が社会的なテーマで制作するようになったのは、第五福竜丸事件がきっかけだった。1954年３月にアメリカが太平洋ビキニ環礁沖で水爆実験を行なった際、マグロ漁船・第五福竜丸が知らずに付近を航行していた。多くの乗組員が被曝し、１人が亡くなると、放射能の危険性が広く報道され、核兵器廃絶を求める「原水爆禁止署名」の運動が起こった。

放射能で汚染された積荷のマグロの処分問題が連日ニュースになり、原水爆は食に関わる生活に身近な問題だと捉えられた。そのため杉並区の公民館で学習をしていた主婦グループが署名活動の発起人となり、全国に広がった。平和運動に女性が積極的に参加し始め、女性作家が反戦をテーマに描くことを促した。招瑞娟もその一人で、反戦や公害問題など社会的なテーマを追求した作品を発表していく。神戸大空襲という辛い戦争体験を抱えていたことは反戦への思いを一層強くした。

招に大きな影響を与えた芸術家は、ケーテ・コルヴィッツと丸木位里・俊（赤松俊子）夫妻だった。彼女たちの作品を知ったきっかけは、帰国した李平凡が中国から送った画集だったという。1958年頃にコルヴィッツの版画集を、また同じ頃に李平凡が編集・発行した『日本画家丸木位里・赤松俊子作品選集』（人民美术出版社、1959年）を手にし、終生にわたって影響を受けた[13]。

直接交流をもったのは版画家の上野誠で、上野から木版画技法の指導を受けた。上野は





左：【図１-１】編集・発行：李文琨（李平凡）
『浮萍集　木刻版画』1943年
表紙　27.4×21.3cm

右：【図１-２】『浮萍集　木刻版画』より
招瑞娟《黄昏》

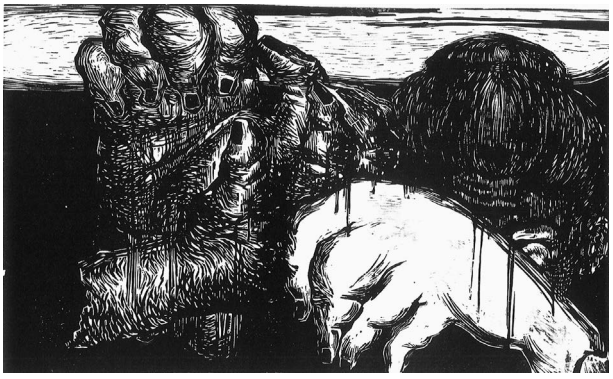
中国木刻に強い関心を抱き、戦後版画運動に参加していた。上野誠と大田耕士の勧めで、1959年からは日本板画院でなく日本版画協会に出品し始め、1962年に会員となる。特に上野誠は招が日本版画協会で活動するうえで後ろ盾となった[14]。

反戦と公害を訴えて

第28回日本版画協会展に出品した《求む》(【図２】1960年、新規収蔵作品)は、海のなかから突き出た無数の手が描かれている。身を寄せ合うように重ねられた手のボリュームと、背景で吹き荒ぶ風の激しさは線の集積で表されている。モノクロの線によって立体感や心象風景を伝えるのは、この時期の彼女のスタイルの特徴だ。白黒の世界のなかに批判精神を込めた象徴的イメージを展開した。

本作にも見られるように、招の作品には太陽がよく描かれている。これは原子力の象徴だという[15]。ここから連想すると、海から伸びた手は水爆実験で生じた水柱に見える。一方で、この手はケーテ・コルヴィッツが《種を粉に挽いてはならない》(1941年)で描いた身を寄せ合う母子をも想起させる。

【図２】招瑞娟《求む》1960年　38×64cm



【図３】招瑞娟《PCB油症患者(1)》1973年　36×60cm

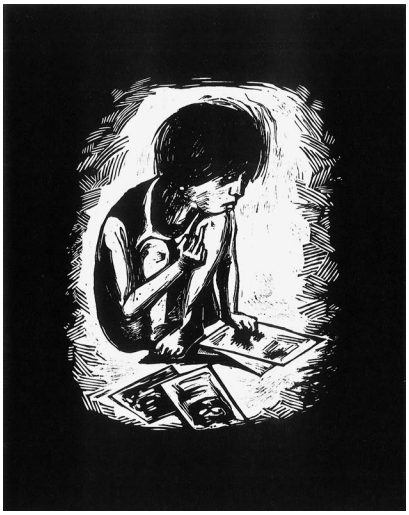
《種を粉に挽いてはならない》には、子どもを戦場に送らせまいと両腕を回して子を守る母親の手が逞しく描かれているからだ。本作を含む２点が評価され、日本版画協会展新人賞を受賞した。

招はその後、公害問題、特に食品公害事件も主題にしていく。前述の通り原水爆反対署名が女性の関心を集めたのは、食の安全に関わる問題でもあったからだった。招は第五福竜丸事件の頃は幼い子どもを育てており、食の問題は切実な関心事だったと思われる。

《PCB油症患者(１)》(【図３】1973年、新規収蔵作品)は「カネミ油症事件」がテーマだ。この事件はカネミ倉庫の食用油にダイオキシン類のPCBが混入した食品公害事件である。西日本を中心に約1.4万人が健康被害を訴えた。1968年頃から患者が出始め、1970年代に関係会社に対する裁判が起こった。本作で表された黒い爪や皮膚は、被害者の症状と苦しみを象徴的に表している。

《ヒソミルクの中毒患者》(【図４】1978年、新規収蔵作品)では「森永ヒ素ミルク中毒事件」の被害を受けた子どもを描いた。この事件では森永乳業の粉ミルクにヒ素が混入し、1955年頃から患者や死者が出始めた。会社が因果関係を認めたのは1970年になってからで、不買運動も起こり、消費者の権利を確立するうえで重要な事件となった。

本作について招は「ヒソミルクの中毒患者も、これは人命軽視の社会問題ではないでしょうか。おそらく、いまのみなさんが忘れてしまっても、中毒にかかった子どもたちは、一生苦しむことでしょう。(中略)暗い部屋の中で、いつもただ一人すわって、クレヨンを手になぐりがきしかできない。この少女を毎日毎日見守っている母の胸の痛みをだれが知ってくれるでしょうか。」[16]と記している。



【図４】招瑞娟《ヒソミルクの中毒患者》1978年　56×45cm

こうした反戦や公害をテーマにした作品には、民族の壁を超えたヒューマニズムの精神が込められている。科学の発展が人類に害をもたらす近現代社会の矛盾に考えを巡らせ、弱者を見捨てる人命軽視の風潮が戦争に繋がると考えた。中国木刻のリアリズムを

受け継ぎながら、日本社会の一員として同時代的な問題に関心を持ち制作を続けたのである。なお本稿では招瑞娟に着目する理由として彼女の属性を挙げたが、彼女固有のアイデンティティーと作品の表現については、より深い考察が必要である。

1980年代の日中交流復活と中国での個展

前述の通り、1940年代後半は日中版画交流が盛んに行われていたが、1950年代後半からは中国国内の政治闘争である反右派闘争などの影響から交流が途絶えていく。さらに1966年からの文化大革命の最中、李平凡は日本のスパイを疑われ僻地での労働改造を経験した。版画を通じた両国の交流が回復するのは1972年の国交回復、1976年の文化大革命終了を待たねばならなかった。

1970年代末からは李平凡も度々来日できるようになり、1980年代から日中版画交流が復活していく。その盛り上がりのなかで、1983年には「招瑞娟版画作品展」(主催：中国美術家協会、北京・中国美術館)が開催され、招の作品が中国で初めて紹介された。両国の交流が中断していた間に、魯迅の精神を日本において開花させた招の作品は、中国でも驚きと称賛をもって受け止められたという。

日中版画交流の歴史を紡ぐ

以上、招瑞娟の歩みと作品について述べてきたが、今回受け入れた招の作品は当館コレクションのなかでいかに活用できるだろうか。当館では浮世絵に影響を与えた近世中国版画を所蔵し、日本の版画史を日中交流の観点からも捉えてきた。また1987年の開館以来、中国版画を紹介する展覧会を度々開催した。なかでも李平凡も協力して1988年に開催した「中国版画2000年」展(第１部「中国現代版画展」、第２部「中国児童版画展」、第３部「中国古代版画展」)は、1980年代に再興した日中版画交流の一つに位置付けられる。当館のこれまでの活動を踏まえて招瑞娟の作品を紹介することで、コレクションを通じて紡ぐ日中版画交流史の奥行きを広げられると考えている。

註

1　招瑞娟作品は実践女子大学香雪記念資料館と兵庫県立美術館にも収蔵された。

2　「闇に刻む光　アジアの木版画運動」展(福岡アジア美術館・アーツ前橋、2018-19年)では、木刻運動が中国大陸だけでなく日本、台湾、シンガポールといった東アジア・東南アジア各地に広がり、背景に中国人・華僑のネットワークがあったことを紹介した。

3　明治美術学会 2022年度第３回例会(2022年９月)発表では、展覧会で紹介できた２人の女性作家に注目した。概要は町村悠香〈研究発表要約〉展覧会報告「彫刻刀が刻む戦後日本　２つの民衆版画運動」展・研究発表「２つの民衆版画運動と女性作家、エスニック・マイノリティ―小林喜巳子、招瑞娟の関わりから」『近代画説』32号(明治美術学会、2023年12月、pp.176-177)を参照。

4　招瑞娟に言及している文献は以下の通り。李平凡著、中国人民政治協商会议北京市委员会文史资料委员会编『版画沧桑 李平凡版画 60年回忆录』(北京出版社、1997年)、李平凡著、李燕・木全恵子訳『版画滄桑』(白帝社、2006年、＊前掲書の翻訳版)、張玉玲「日中版画交流史―李平凡在日期間中の活動を中心に」『中国 21』No.28(愛知大学現代中国学会、2007年12月、pp.261-282)、神阪京華僑口述記録研究会編『聞き書き・関西華僑のライフヒストリー第２号』(2009年12月、神戸華僑歴史博物館)、曽士才「戦中・戦後における神戸華僑の体験：華僑学校の教職員の事例」『異文化 論文編』19(法政大学国際文化学部、2018年４月、pp.53-84)

5　詹氏がまとめた招瑞娟と詹永年の来歴のメモ(2023年９月受け取り)では、招は1925年に神戸で生まれたと書いており、詹氏は口頭でも繰り返し妻は神戸生まれだと述べていた。ここでは『招瑞娟版画集』の年譜にならった。

6　広東語で教育する神戸華僑同文学校と北京語で教育する神戸中華公学が合併し、1939年に北京語で教育する神戸中華同文学校が成立した。

7　李平凡の来歴と活動の評価は『中国20世紀自伝回想録解題集『野草』増刊号』(中国文芸研究会、2022年７月)の解題・李平凡(執筆：藤井得弘、pp.188-189)に端的にまとまっている。第８回横浜トリエンナーレ(2024年３月-６月)では小セクション「李平凡の非凡な活動：版画を通じた日中交流」で李平凡が紹介される。

8　招の教え子のインタビュー (2022年２月26日、神戸華僑歴史博物館)では、藍蔚邦は実際は帰国しなかった。

9　曽士才「戦中・戦後における神戸華僑の体験／華僑学校の教職員の事例」『異文化 論文編』19、pp.69-76

10　財団法人芸術研究振興財団、東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学 百年史 東京美術学校篇第三巻』ぎょうせい、1997年、p.1019

11　来歴のメモ(2023年９月受け取り)では東京美術学校で学んだのは２年だったという。吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究―東京美術学校留学生史料』(ゆまに書房、2009年)によると、『平成２年(1990)　同窓生名簿』では「昭和23年３月31日に無届長期欠席のため除名。(26年３月修了)」となっている。

12　招の教え子のインタビュー (2022年２月26日、神戸華僑歴史博物館)

13　『版画滄桑』では丸木夫妻の画集は反右派闘争のあおりで発行直後は中国で公開できなかったとされ、招がどのようにして日本で入手したか検討が必要である。

14　萩原秀雄が『招瑞娟版画集』に寄せたテキストから上野の後押しが読み取れる。

15　詹永年氏インタビュー (2023年４月９日、詹氏自宅)

16　招瑞娟「この子らに平和な明日を」『まなぶ』1985年８月、労働大学出版センター、pp.5-8

2022年度　新収蔵作品

以下のリストは2022年度に当館が収蔵した作品の一覧である。
新収蔵という性質上、作品によっては調査続行中のものがある。
そのため各作品とも将来、題名・制作年代、技法等のデータに変更が生じる可能性がある。
リストの順番は原則として作者の生年順とし、同一の寄贈者からの受贈作品はまとめて記載した。

記載順：
作者名／生没年／作品名／制作年／技法／サイズ（mm）／寄贈者（敬称略）／図版掲載の有無

・サイズは縦×横の順。
・原則として銅版画は原版（プレートマーク）のサイズ、その他の技法は図柄のサイズを示している。
　ただし、紙面が断ち落とされている作品に関してはこの限りではない。
・支持体は全て紙。

寄贈作品

番号	作者（日）	作者（英）	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ（mm）	寄贈者	図版
1	川瀬 巴水	KAWASE Hasui	1883-1957		霧之朝（四谷見附）	1932年	木版多色	364×240	三橋富士枝	
2	平塚運一	HIRATSUKA Un'ichi	1895-1997		裸婦金剛経	1950年	木版	320×234	個人（東京）	
3	平塚運一	HIRATSUKA Un'ichi	1895-1997		浄瑠璃寺の塔	1960年	木版	438×284	個人（東京）	
4	浜口陽三	HAMAGUCHI Yozo	1909-2000		くるみ	1959年	メゾチント	541×232	個人（東京）	
5	瑛九	EI-Kyu	1911-1960		スケート	1956年	リトグラフ	436×285	個人（東京）	
6	畦地梅太郎	AZECHI Umetaro	1902-1999		石鎚山	1985年	木版多色	395×798	個人	○
7	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		蔵	1935年	エッチング	121×99	笠木ゆり	
8	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		長崎への車中スケッチ	1937年	ドライポイント	120×93	笠木ゆり	
9	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		顔 A（幸ちゃん）	1937年	エッチング	278×224	笠木ゆり	
10	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		十字架から降ろされるキリスト（リューベンス模写）	1937年	エッチング	145×91	笠木ゆり	
11	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		女の横顔（ピカソ模写）	1937年頃	エッチング	79×112	笠木ゆり	
12	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		少女像	1937年頃	エッチング	187×149	笠木ゆり	
13	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		エチュード（横臥裸婦　1）	1938年	エッチング	133×179	笠木ゆり	
14	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		エチュード（横臥裸婦　2）	1938年	エッチング	133×179	笠木ゆり	○
15	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		裸婦	1938年	エッチング、ドライポイント	242×182	笠木ゆり	
16	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		少女像	1940年頃	エッチング	182×137	笠木ゆり	
17	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		深川さん	1940年頃	エッチング、ドライポイント	485×365	笠木ゆり	
18	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		Sの像	1941年	エッチング	140×92	笠木ゆり	
19	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		自画像	1941年頃	エッチング	120×90	笠木ゆり	
20	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		（仮称）砧を打つ	不詳	エッチング	84×131	笠木ゆり	
21	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		仰臥	1954-62年	エッチング、アクアチント、ソフトグランド・エッチング	182×239	笠木ゆり	
22	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		いちじく	1954-62年	メゾチント	284×201	笠木ゆり	
23	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		墜	1954-62年	エッチング、アクアチント	242×363	笠木ゆり	
24	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		月の森の魚	1954-62年	エッチング、アクアチント	364×240	笠木ゆり	
25	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		空中ブランコ	1954-62年	エッチング、アクアチント	160×195	笠木ゆり	
26	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		綱の上	1954-62年	エッチング、アクアチント	268×197	笠木ゆり	
27	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		ローラースケート	1954-62年	エッチング、アクアチント	241×365	笠木ゆり	

番号	作者(日)	作者(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
28	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		バレリーナ	不詳	エッチング、アクアチント、ドライポイント	177×116	笠木ゆり	
29	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		バレリーナ　2	不詳	エッチング	178×116	笠木ゆり	
30	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		人々	不詳	エッチング、アクアチント	162×218	笠木ゆり	
31	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		座像	不詳	エッチング、アクアチント	362×301	笠木ゆり	
32	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		深海の魚	不詳	モノタイプ	97×188	笠木ゆり	
33	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		牧神	不詳	モノタイプ	264×194	笠木ゆり	
34	笠木實	KASAGI Minoru	1920-2018		緑陰	2008年	エッチング	223×182	笠木ゆり	
35	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		ねこのシジミ	1996年	エッチング	150×215	和田誠事務所	
36	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		「さよならバードランド」カバー表1	1996年	エッチング	150×215	和田誠事務所	
37	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		「さよならバードランド」カバー表4	1996年	エッチング	100×150	和田誠事務所	
38	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		オルフェ	1998年	エッチング	300×250	和田誠事務所	
39	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		道	1998年	エッチング	300×250	和田誠事務所	
40	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		ハリウッド1	1998年	エッチング	300×250	和田誠事務所	
41	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		フレッド&ジンジャー	1998年	エッチング	300×250	和田誠事務所	
42	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		カリガリ博士	1998年	エッチング	225×225	和田誠事務所	
43	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		チャーリー・チャップリン	1998年	エッチング	225×225	和田誠事務所	○
44	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		カミング・スーン	1998年	エッチング	225×225	和田誠事務所	
45	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		メトロポリス	1998年	エッチング	225×225	和田誠事務所	
46	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		『ガクの絵本』原画(7点)	1999年	エッチング	200×140他	和田誠事務所	
47	和田誠	WADA Makoto	1936-2019		CD「YOU CAN DREAM」道下和彦のための原画(3点)	2009年	エッチング	120×120	和田誠事務所	
48	相笠昌義	AIGASA Masayoshi	1939年生まれ		都会人のためのモニュマン67-I	1967年	エッチング	467×462	紅梅茂樹・穣	○
49	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012	古事記	(印章)	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
50	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		イザナキとイザナミ	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
51	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		神々と国々の誕生	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
52	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		イザナミと八雷神	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
53	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		八雷神に追われるイザナキ	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
54	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		黄泉比良坂のイザナキ	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
55	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		三大神を生むイザナキの禊	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
56	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		スサノヲを待ち受けるアマテラス	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
57	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		スサノヲの乱行	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
58	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		天の岩戸に隠れるアマテラス	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
59	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		アメノウズメの熱演	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
60	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		戸口へおびき寄せられるアマテラス	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
61	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		オロチと対決するスサノヲ	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	○
62	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		オホクニヌシがスセリビメを得るまで	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
63	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		オホナムヂの脱出行	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
64	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		愛	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
65	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		ニニギの恋の成就	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
66	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		海幸と山幸	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
67	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		山幸の愛の歌	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	

番号	作者(日)	作者(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
68	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012	古事記	クマソ兄弟との酒宴	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
69	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		三韓をのぞむ神功皇后	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
70	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		凱旋	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
71	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		戦闘	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
72	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		皇位のゆずり合い	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
73	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		カルノミコの道ならぬ恋	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
74	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		弟に狙われるミコ	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
75	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		流刑地に果てる兄妹	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
76	ヨルク・シュマイサー	Jörg SCHMEISSER	1942-2012		“倭方に西風吹き上げて…”	1970年	木版	485×295(紙)	シュマイサー敬子	
77	森光子	MORI Mitsuko	1944年生まれ		詩画集『天空の五指』(12点)	2016年	スクリーンプリント(多色)	各150×150 ※1点のみ 200×180	作家	○
78	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(海景)	1988年以前	ペン	200×268	渡邉ひさ江	
79	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(水流)	1988年以前	水彩	273×200	渡邉ひさ江	
80	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(窓から空)	1988年以前	ペン	253×177	渡邉ひさ江	
81	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(砂漠の植物)	1988年以前	ペン	250×335	渡邉ひさ江	○
82	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		黒の教会の俯瞰図、ルーマニア・ブラショク(再制作)	不明	ペン、墨	140×198	渡邉ひさ江	
83	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		聖母子	2001年	鉛筆	260×180	渡邉ひさ江	
84	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(オークの巨木)	2008年	水彩	300×300	渡邉ひさ江	
85	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(蝶)	不明	エングレーヴィング	119×90	渡邉ひさ江	
86	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		昼顔	1985年	エングレーヴィング	235×175	渡邉ひさ江	
87	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		野苺	1985年	エングレーヴィング	236×175	渡邉ひさ江	
88	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(木の実)	1985年?	エングレーヴィング	220×160	渡邉ひさ江	
89	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		ブナの老樹	1985年	エングレーヴィング	220×160	渡邉ひさ江	
90	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		(鳥)	不明	ドライポイント、手彩色	136×87	渡邉ひさ江	
91	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		樹下	1986年	エングレーヴィング	235×360	渡邉ひさ江	
92	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		山峡	1988年	エングレーヴィング	190×280	渡邉ひさ江	
93	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		十六歳・朋	1994年	ドライポイント	160×125	渡邉ひさ江	
94	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		十六歳・晶	1994年	ドライポイント	160×125	渡邉ひさ江	
95	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		蒲公英	1994年	エングレーヴィング	120×165	渡邉ひさ江	
96	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		冬のダケカンバ	2007年	エングレーヴィング	118×178	渡邉ひさ江	
97	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		Archaeopteryx Fossil	2009年	エングレーヴィング	162×112	渡邉ひさ江	
98	門坂流	KADOSAKA Ryu	1948-2014		Platax teira Fossil	2009年	エングレーヴィング	162×112	渡邉ひさ江	
99	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ	TORSO	will	2007年	フォトエッチング、アクアチント、ルーレット、フォトポリマーグラヴュール	420×295	作者	
100	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		Story	2008年	フォトエッチング、アクアチント、ルーレット、フォトポリマーグラヴュール	420×295	作者	
101	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		right	2008年	フォトエッチング、アクアチント、ルーレット、フォトポリマーグラヴュール	420×295	作者	
102	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		voice	2008年	フォトエッチング、アクアチント、ルーレット、フォトポリマーグラヴュール	420×295	作者	
103	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		one day	2014年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	242×415	作者	○

番号	作者(日)	作者(英)	生没年	連作名	作品名	制作年	技法	サイズ(mm)	寄贈者	図版
104	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		a day	2015年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	205×354	作者	
105	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		doll	2015年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	205×354	作者	
106	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		corridor 2015	2015年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	242×415	作者	
107	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		Mother and child	2016年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	147×292	作者	
108	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		standing	2016年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	147×292	作者	
109	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		exhibition	2017年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	147×292	作者	
110	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ	WATER	fountain	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	132×415	作者	
111	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		sea	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	131×417	作者	
112	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		hill	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	131×420	作者	
113	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		Seine	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	132×418	作者	
114	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		Thames	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	130×420	作者	
115	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		riverside	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	130×420	作者	
116	藤田修	FUJITA Osamu	1954年生まれ		forest	2022年	フォトポリマーグラヴュール、ドライポイント	132×422	作者	
117	文月恵津子	FUZUKI Etsuko	1955-2020		Phenomenon　13点	2012年	メゾチント	158×54	本田貴子	○
118	若林奮	WAKABAYASHI Isamu	1936-2003	52記	6	1997年	エッチング、手彩色	148×99	長谷見雄二	○
119	若林奮	WAKABAYASHI Isamu	1936-2003		Isamu Wakabayashi(1992-N.Y.-)	1992年	メタルコラージュ、ドローイング	310×262×10	長谷見雄二	
120	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006	Red Lotus in Well-Locus Sutra	No.1	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	○
121	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006		No.2	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	
122	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006		No.3	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	
123	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006		No.4	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	
124	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006		No.5	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	
125	井田照一	IDA Shoichi	1941-2006		No.6	1991年	ソフトグランドエッチング、エッチング、スピットバイト、ドライポイント、シーヌコレ(雁皮紙)	765×560	長谷見雄二	
126	榎倉康二	ENOKURA Koji	1942-1995		干渉　TV　No.1	1989年	スクリーンプリント	650×500	長谷見雄二	
127	榎倉康二	ENOKURA Koji	1942-1995		Work	1987年	スクリーンプリント	660×980	長谷見雄二	
128	榎倉康二	ENOKURA Koji	1942-1995		2つのしみ　No.2	1995年	スクリーンプリント	760×1100	長谷見雄二	○
129	池田俊彦	IKEDA Toshihiko	1980年生まれ		笑う黄金種族　騎士と死と悪魔	2017年	エッチング、雁皮紙	1000×500	長谷見雄二	○

【小野忠重旧蔵コレクション(浮世絵)】　寄贈者：小野近士

番号	作者	作品名	制作年	判型・技法
1	安達吟光	大日本婦人束髪図解	明治18年(1885)	大判錦絵3枚続
2	安達吟光	女礼式之図	明治20年(1887)	大判錦絵3枚続
3	磯野文斎	長崎八景　神崎帰帆	江戸時代・19世紀	小判錦絵
4	磯野文斎	長崎八景　稲佐夕照	江戸時代・19世紀	小判錦絵
5	磯野文斎	長崎八景　稲佐夕照(高見沢版複製)		182×263
6	歌川国貞(三代豊国)	清玄法師　さくら姫	安政2年(1855)3月	大判錦絵2枚続
7	歌川国貞(三代豊国)	白井権八　幡隨長兵衛	安政5年(1858)9月	大判錦絵2枚続
8	歌川国貞(三代豊国)	四代目中村歌右衛門の樋口二郎、三代目関三十郎の権四郎	嘉永2-3年(1849-50)頃	大判錦絵
9	歌川国貞(三代豊国)	初代坂東しうかの清玄尼、二代目中山文五郎の奴淀平	嘉永2-5年(1849-52)頃	大判錦絵
10	歌川国貞(三代豊国)	和藤内三宮　八代目市川団十郎、錦枡女　初代坂東しうか、伍将軍甘輝	嘉永3年(1850)	大判錦絵2枚続
11	歌川国貞(三代豊国)	東海道五十三次之内　石薬師庄野間　御殿山　武智光秀	嘉永5年(1852)	大判錦絵
12	歌川国貞(三代豊国)	東海道五十三次之内　吉原　小なみ	嘉永5年(1852)	大判錦絵
13	歌川国貞(三代豊国)	東海道五十三次之内　土山水口間　松ノ尾　松王丸	嘉永5年(1852)	大判錦絵
14	歌川国貞(三代豊国)	東海道五十三次之内　赤阪　澤井又五郎	嘉永5年(1852)	大判錦絵
15	歌川国貞(三代豊国)	東海道　日本橋品川間　高輪　由良之助	嘉永5年(1852)	大判錦絵
16	歌川国貞(三代豊国)	三枡源之助の安部の保名	天保2年(1831)	大判錦絵
17	歌川国貞(三代豊国)	流行美人合　新地八景	天保頃	大判錦絵3枚続
18	歌川国貞(三代豊国)	御座敷狂言　こしらゑの図　五番続　＊うち右2図	文化12-13年(1815-16)頃	大判錦絵5枚続のうち2枚
19	歌川国貞(三代豊国)	初代尾上松緑死絵	文化12年(1815)	大判錦絵
20	歌川国貞(三代豊国)	父子の対面(二代目沢村田之助と四代目沢村宗十郎死絵)　＊うち左図	文化14年(1817)	大判錦絵2枚続のうち1枚
21	歌川国貞(三代豊国)	二代目沢村田之助死絵	文化14年(1817)	大判錦絵
22	歌川国貞(三代豊国)	二代目沢村田之助、二代目中村東蔵、四代目沢村宗十郎、四代目瀬川路考死絵	文化14年(1817)	大判錦絵3枚続
23	歌川国貞(三代豊国)	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
24	歌川国貞(三代豊国)	四代目瀬川路考と四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵2枚続
25	歌川国貞(三代豊国)	当世美女　阿津満風景　関屋の蛍狩	文政	大判錦絵
26	歌川国貞(三代豊国)	月本武蔵　市川団十郎、惣六女房おはま　瀬川菊之丞、 政右衛門女房お谷　市川門之助	文政6年(1823)	大判錦絵3枚続
27	歌川国貞(三代豊国)	三代目市川門之助死絵	文政7年(1824)	大判錦絵
28	歌川国貞(三代豊国)	市川新車と大谷馬十死絵	文政7年(1824)	大判錦絵
29	歌川国貞(三代豊国)	市川新車と大谷馬十死絵	文政7年(1824)	大判錦絵
30	歌川国貞(三代豊国)	紅毛油画風　安芸の宮島	文政後期-天保初期	大判錦絵
31	歌川国貞(三代豊国)	当世美人合　辰巳	文政末-天保初頃	大判錦絵
32	歌川国貞(三代豊国)	なまゑひ仕丁　市村家柑橘、三人なまゑい　沢村訥升、なまゑひ仕丁　市川九蔵		大判錦絵3枚続
33	歌川国貞(三代豊国)	吉原七小町　かよひ小町		大判錦絵
34	歌川国貞(三代豊国)	関兵衛実は斎藤道三　坂東三津五郎、箕作実は武田勝頼　市村羽左衛門、 八重がきひめ　岩井杜若		大判錦絵3枚続
35	歌川国貞(三代豊国)	入江の丹蔵　中山文五郎、安徳天王　市川団子、すけのつぼね　岩井粂三郎、 相模五郎　市川団十郎		大判錦絵3枚続
36	歌川国貞(三代豊国)、 歌川芳虎、応翠	江戸の花　名勝会　十四　北組	文久2年(1862)12月	大判錦絵
37	二代歌川国貞	三浦やけいせい　岩藤　沢村田之助、三浦や尾上　河原崎国太郎	慶応3年(1867)1月	大判錦絵2枚続
38	二代歌川国貞	若者ゑんま平三　山崎巴二右ヱ門、大磯屋の千鳥　河原崎国太郎、かむろ片貝 三代目岩井久次郎、金石楼の主人　河原崎権十郎、太鼓持つるの丸伝三　中村芝翫、 げい者おてう　中村いてう、橘千鳥の祐　市村家橘、かん菊蝶の時　沢村田之助	元治元年(1864)12月	大判錦絵5枚続

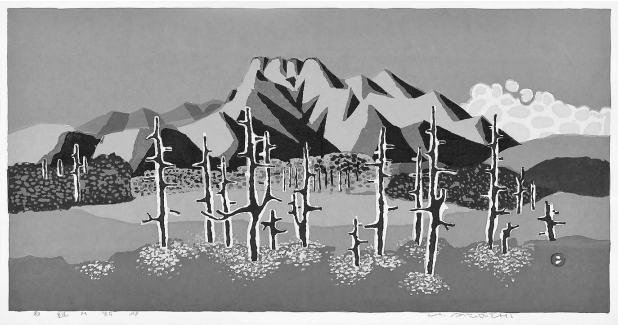
番号	作者	作品名	制作年	判型・技法
39	歌川国虎	浮絵目黒不動参詣群集之図		大判錦絵
40	歌川国虎	近江八景　比良ノぼせつ		大判錦絵
41	歌川国直	二代目沢村田之助死絵	文化14年(1817)	大判錦絵
42	歌川国丸	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
43	歌川国安	駱駝之図	文政4年(1821)	大判錦絵
44	歌川国安	市川団十郎　岩井粂三郎　坂東三津五郎	文政頃	大短冊判錦絵
45	歌川国安	鶴屋内しかく		大判錦絵
46	歌川国安	新板　浮絵金龍山浅草寺之図		大判錦絵
47	歌川国芳	風流生人形	安政3年(1856)2月	大判錦絵2枚続
48	歌川国芳	三浦屋揚巻　初代坂東しうか、花川戸助六　八代目市川団十郎	嘉永3年(1850)	大判錦絵2枚続
49	歌川国芳	蜂右衛門　初代中山市蔵、渡し守甚平　四代目坂東彦三郎、 浅倉当吾　四代目市川小団次	嘉永4年(1851)	大判錦絵2枚続
50	歌川国芳	艶姿十六女仙　蝦蟇	弘化3-嘉永元年(1846-48)頃	大判錦絵
51	歌川国芳	唐土二十四孝　王祥	弘化4-嘉永3年(1847-1850)頃	中判錦絵
52	歌川国芳	唐土二十四孝　董永	弘化4-嘉永3年(1847-1850)頃	中判錦絵
53	歌川国芳	唐土二十四孝　朱寿昌	弘化4-嘉永3年(1847-1850)頃	中判錦絵
54	歌川国芳	人をばかにした人だ	弘化4年(1847)頃	大判錦絵
55	歌川貞虎	神功皇后		大判錦絵
56	歌川貞秀	新版東海道五十三次行列双六	慶応元年(1865)6月	716×601
57	歌川貞秀	神名川横浜華郭之風景	万延元年(1860)	大判錦絵3枚続
58	歌川貞秀	大日本国郡名所　越後古志郡長岡	明治元年(1868)	大判錦絵
59	歌川豊国	でつち長吉　瀬川路考	文化7年(1810)	大判錦絵
60	歌川豊国	四代目瀬川路考死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
61	歌川豊国	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
62	歌川豊国	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
63	歌川豊国	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
64	歌川豊国	四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
65	歌川豊国	四代目瀬川路考死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
66	歌川豊国	四代目瀬川路考死絵と四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵2枚続
67	歌川豊国	四代目瀬川路考死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
68	歌川豊国	四代目瀬川路考と四代目沢村宗十郎死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
69	歌川豊国	四代目瀬川路考死絵	文化9年(1812)	大判錦絵
70	歌川豊国	三代目市川門之助と大谷馬十死絵	文政7年(1824)	大判錦絵
71	歌川豊国	三代目市川門之助と大谷馬十死絵	文政7年(1824)	大判錦絵
72	歌川豊国	白井権八　五代目岩井半四郎		大判錦絵
73	歌川豊国	(七代目市川団十郎ほめことば)		大判錦絵
74	歌川豊国	江戸大相撲東之方力士鏡(因州猪王山森右衛門…)		墨摺、332×445
75	歌川豊国	江戸大相撲東之方力士鏡(江戸階ヶ嶽龍右衛門…)		墨摺、332×443
76	二代歌川豊国	四代目坂東三津五郎		大判錦絵
77	歌川豊春	浮絵和国景跡江戸深川八幡之図	安永	大判錦絵
78	歌川豊春	新板浮絵一ノ谷鵯越逆落ノ図	安永	大判錦絵
79	歌川豊春	浮絵和国景跡頼朝公冨士蒔苅之図	安永	大判錦絵
80	歌川豊春	浮絵　伊勢太神宮両所太々御神楽之図	不詳	大判錦絵

番号	作者	作品名	制作年	判型・技法
81	歌川豊春	八ヶ夕　七　吉原紋日	明和7-9年(1770-72)	小判錦絵
82	歌川豊広・歌川豊国	堀之内妙法寺恵方参之図	寛政末	大判錦絵5枚続のうち4枚
83	歌川広重	国尽　張交図会　十八	嘉永5年(1852)12月	大判錦絵
84	三代歌川広重	東京開華名所図絵之内　金龍山浅草寺四万六千日群集		大判錦絵
85	三代歌川広重	東京名所浅草金龍山図		大判錦絵
86	三代歌川広重	東京名所浅草金龍山		大判錦絵
87	二代歌川芳艶	近世義勇伝　関鉄之助		大判錦絵
88	歌川芳豊画、仮名垣魯文筆	西両国広小路におゐて三月上旬より興行仕候	文久3年(1863)	349×482
89	歌川芳虎	花競今様姿　菊の花		大判錦絵
90	栄松斎長喜	遊郭善玉悪玉　＊うち右1図		大判錦絵3枚続のうち1枚
91	勝川春紅	浮絵江都増上寺之図		間判錦絵
92	勝川春紅	浮絵江都高輪日出之図		間判錦絵
93	勝川春章	四代目岩井半四郎	安永-天明	細判錦絵
94	勝川春章	初代中村野塩		細判錦絵
95	勝川春章	三代目沢村宗十郎の大星由良之助		細判錦絵
96	勝川春章か	五代目市川団十郎の六部		細判錦絵
97	勝川春扇	(汐干狩)		間判錦絵
98	勝川春扇	浮絵尾張町ゑひすや之図		大判錦絵
99	勝川春扇	浮絵芝三縁山増上寺之図		大判錦絵
100	勝川春扇	(海浜童子図)		大判錦絵
101	勝川春扇	遊女図		大判竪2枚続
102	勝川春扇か	(上野清水堂花見図)		大判錦絵
103	勝川春亭	品川御殿山	安政2年(1855)2月	間判錦絵
104	勝川春亭	薩摩守忠度		大判錦絵
105	葛飾北斎	摺物(人形遣い)	文政初年	色紙判摺物
106	葛飾北斎	風流六玉川		小判錦絵(150×175)
107	葛飾北斎	新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図		大判錦絵
108	葛飾北斎	摺物(江の島)		長判摺物
109	葛飾北洋	新町中扇屋　瓜生野太夫　若野　枝折		大判錦絵
110	菊川英山	傘を持つ美人	文化末-文政前期	大判錦絵竪2枚続
111	北尾政美	浮絵仮名手本忠臣蔵　初段		大判錦絵(304×428)
112	喜多川菊麿	〓(欠)見立十景　王子詣の図		間判錦絵
113	鍬形蕙斎	正月図		219×317
114	溪斎英泉	東都花暦　上野清水之桜	文化-天保頃	小判錦絵
115	溪斎英泉	新版浮絵五百羅漢之図	文政初期	大判錦絵
116	溪斎英泉	(障子に影)炭をわる…		大判錦絵
117	溪斎英泉	武者絵		大判錦絵
118	溪斎英泉	松葉屋内粧ひ		大判錦絵
119	溪斎英泉	浮世四十八癖　爪引の潮来節ハあだものの癖		大判錦絵
120	溪斎英泉	今様美女競　娼妓		大判錦絵
121	溪斎英泉	見立吉原五十三対　大礒　傾城道中双録(※女偏)		大判錦絵
122	溪斎英泉	摺物(堅田　熊喜十)		長判錦絵

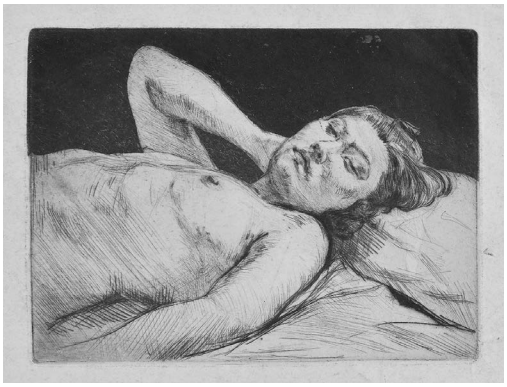
番号	作者	作品名	制作年	判型・技法
123	恋川春政(晩器)	(帯解)		柱絵判錦絵
124	昇亭北寿	忠臣蔵三段目		小判錦絵
125	鳥高斎栄昌	(芝居見物の図)		柱絵判錦絵
126	魚屋北溪	柳番続　柳茶		色紙判摺物
127	魚屋北溪	柳番続　柳屋		色紙判摺物
128	魚屋北溪	柳番続　柳湯		色紙判摺物
129	鳥居清広	あいこのわか　山下金作、かまだ又八　市川八百蔵	宝暦6年(1756)	細判紅摺絵
130	中井芳瀧	摺物(芸妓図)		392×484
131	二代野村芳国	京坂名所図絵　大阪城ばんば之図	明治18年(1885)	大判錦絵4枚続
132	梅素亭玄魚	古今書画手鑑	安政元年(1854)2月	大判錦絵
133	百斎九信	(男女図)		柱絵判錦絵
134	楊洲周延	真美人　廿六	明治30年(1897)	大判錦絵
135	楊堂玉英	引札(呉服商和泉屋)		510×378
136	礫川亭永理	浮絵江戸日本橋小田原町肴市之図		大判錦絵
137	無款	写真絵(弥次郎兵衛・喜多八)		大判錦絵
138	無款	泥絵(外桜田の図)		紙本着色、297×471
139	無款	上方役者絵		紙本着色、311×212
140	無款	名人草		大判錦絵
141	無款	(松嶋図)		間判錦絵
142	無款	大清人(長崎版画)		紙本木版多色摺、444×160
143	無款	紅毛舩四艘入津之図(長崎版画)		紙本木版多色摺、325×440
144	無款	唐船(長崎版画)		紙本木版多色摺、335×440
145	無款	中村歌右衛門　瀬川路考		細判錦絵
146	無款	新版浮画　三芝居顔見世狂言之図		大判錦絵
147	無款(柳々居辰斎か)	蘭字枠江戸名所　勢州桑名渡		大判錦絵
148	無款(朝周景か)	戸塚図		紙本墨画淡彩、275×351

【第47回全国大学版画展　収蔵作品(町田市立国際版画美術館賞)】 制作年：2022年　寄贈者：版画学会

番号	作者(日)	作者(英)	大学名	学年	作品	技法	サイズ(mm)
1	わたなべ淑子	WATANABE Yoshiko	渋谷ファッション＆アート専門学校	表現研究科	地中より呼びとよむ　赳	銅版	600×770
2	劉珍珍	LIU Zhenzhen	渋谷ファッション＆アート専門学校	美術表現科	インカウンター	リトグラフ	560×760
3	堀江大晴	HORIE Taisei	創形美術学校	3年	good night	リトグラフ、シルクスクリーン	970×930
4	松尾華子	MATSUO Hanako	武蔵野美術大学	院2年	grow legs	リトグラフ	1100×790
5	鈴木遼弥	SUZUKI Ryoya	多摩美術大学	4年	Curving Photo #3	木版、デジタルプリント	910×652
6	中島瑞貴	NAKAJIMA Mizuki	東京造形大学	院2年	ふたつのぼんぼり帽子	木版	610×855
7	ソ ジオ	SEO Geo	東京造形大学	4年	OO新聞	スクリーンプリント	812×545
8	岡本彩椰	OKAMOTO Saya	日本大学	院2年	絢爛	銅版	600×600
9	李玲瓏	LI LingLong	女子美術大学	院2年	青い空想の部屋に	木版	635×940

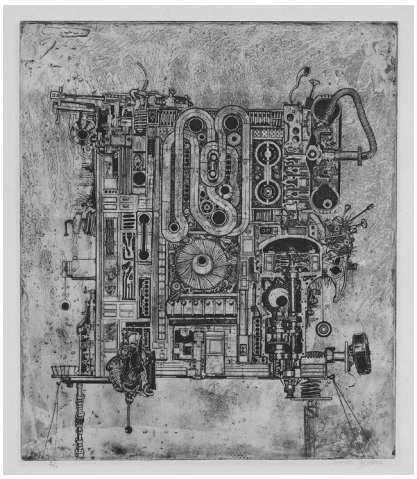


6　畦地梅太郎《石鎚山》1985年



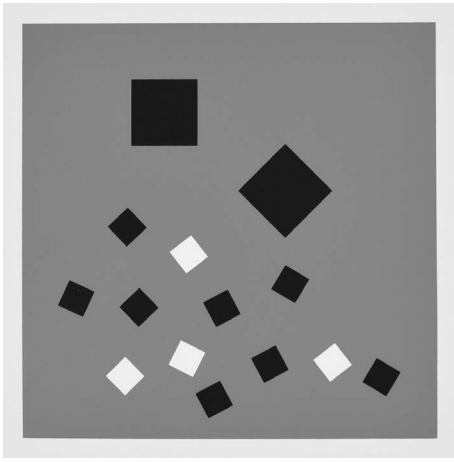
14　笠木實《エチュード(横臥裸婦　2)》1938年

43　和田誠《チャーリー・チャップリン》1998年
©Wada Makoto



48　相笠昌義《都会人のためのモニュマン67-I》
1967年

61　ヨルク・シュマイサー『古事記』より
《オロチと対決するスサノヲ》1970年

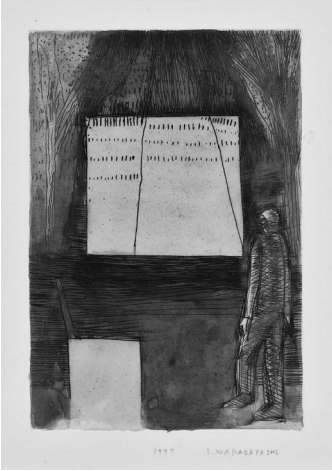


77　森光子　詩画集『天空の五指』より　2016年

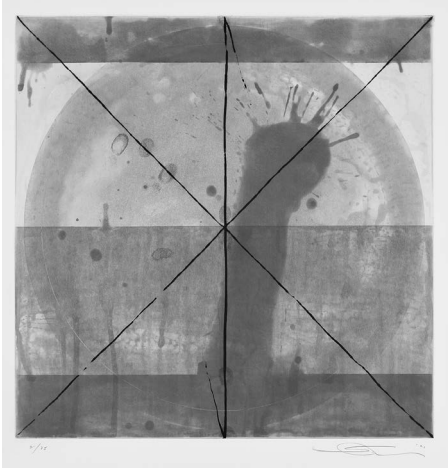
81　門坂流《(砂漠の植物)》1988年以前

103　藤田修《one day》2014年

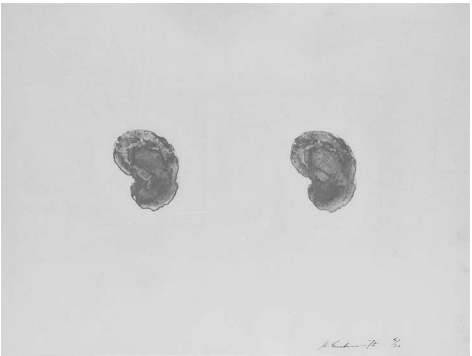
117　文月恵津子《Phenomenon》2012年



118　若林奮『52記』より《6》1997年



120　井田照一
『Red Lotus in Well-Locus Sutra』より《No.1》
1991年



128　榎倉康二《2つのしみ　No.2》1995年

129　池田俊彦《笑う黄金種族　騎士と死と悪魔》2017年

2022年度　展覧会の記録

【企画展示室】

「彫刻刀が刻む戦後日本―２つの民衆版画運動」 2022年４月23日（土）～７月３日（日）	62日間 総入場者数	8,839人
本展では戦後日本で展開した２つの民衆版画運動を紹介した。１つは中国の木刻（木版画）運動の影響で版画による社会運動と版画の普及を目指した戦後版画運動。もう１つは、戦後版画運動から派生し、全国の小中学校教員たちが学校教育のなかで版画教育を広めた教育版画運動である。約400点の豊富な作品と資料を通して、２つの民衆版画運動を連続した事象として捉える初めての展覧会として開催し、あまり知られることのなかった版画史の一側面に光を当てる機会とした。 ６章構成をとり、１～３章まではほぼ時系列とした。「１章　中国木刻のインパクト　1947-」は中国木刻の全国巡回展を紹介、「２章　戦後版画運動　時代に即応する美術　1949-」では労働運動、農民運動、平和運動に関連する作例を展示、「３章　教育版画運動と「生活版画」 1951-」では教育版画運動の興りを提示した。「４章　ローカルへ　グローバルへ　版画がつなぐネットワーク」では草の根の活動として全国の労働者らのサークル誌、国際的な広がりとして中国・アメリカ・ソ連での展覧会を紹介した。「５章　ライフワークと表現の追求」では主題・造形性の追求に着目し各作家の個性が伝わるよう作品を選定した。「６章　教育版画運動の開花　1950年代-90年代」では教育版画運動の展開と全国的広がりが体感できるよう、各地の共同制作大型作品と版画文集・版画集を展覧した。 チラシやHPの紹介文冒頭では「子どもの頃に版画を作ったことはありますか？」と問いかけ、キャッチコピーは「工場で、田んぼで、教室で　みんな、かつては版画家だった」とした。これにより多くの人が学校で経験した版画制作の記憶を呼び起こし、自分が行った活動に実は歴史的な背景があったことを知ってもらい興味を喚起することをねらった。また戦後の様々な社会問題、平和運動を扱った作品を展示したため、ニュースなどに関心を持つ層にもアプローチした。メディアでも好意的に取り上げられたことで、多くの展覧会レビュー（30件以上）が寄せられ、一部はクロスレビューに発展するなど波及効果が大きかった。		
主催：町田市立国際版画美術館		
助成：芸術文化振興基金		
印刷物：図録（B5変型、全240頁）、チラシ、ポスター、DM		
図録執筆者：池上善彦、鳥羽耕史（早稲田大学文学学術院）、白凛（一般社団法人在日コリアン美術作品保存協会　代表理事）、町村悠香		

関連行事	開催日　参加者総数	586人
◆版画作品募集　「私も版画家だった」	会期中全日程	19人
◆トークイベント　「アーティストがみる教育版画」 講師：湯浅克俊（版画家）　聞き手：担当学芸員・町村悠香	５月21日（土）	41人
◆子ども講座　みてみてつくろう「昭和にタイムトラベル！　ガリ版にチャレンジ」 講師：杉浦幸子（武蔵野美術大学芸術文化学科）　制作指導：普及係学芸員・上村牧子	５月７日（土）	16人
◆絵本・紙芝居読み聞かせ　おはなしのじかん 講師：せりがや冒険遊び場プレーリーダー	会期中の 毎週木曜日（10回）	189人
◆絵本・紙芝居読み聞かせ　みんなのステージ 講師：せりがや冒険遊び場プレーリーダー、担当学芸員・町村悠香	５月14日（土）	60人
◆上映会　教育映画『たのしいはんが』解説付き上映会　講師：担当学芸員・町村悠香	６月４日（土）	52人
◆担当学芸員によるスライドトーク　講師：担当学芸員・町村悠香	５月８日（日） ６月18日（土）	79人
◆プロムナード・コンサート　「うたごえ喫茶で甦る青春」 出演：奥村浩樹（テノール）、鵜戸西到（ピアノ）	６月19日（日）	130人

「長谷川潔 1891-1980展　―日常にひそむ神秘―」 2022年７月16日（土）～９月25日（日）	62日間 総入場者数	7,405人

長谷川潔（1891～1980）は1910年代半ばに版画家として創作活動を開始、1918年に日本を去ってフランスへ渡って以来パリを拠点に活動した銅版画家。サロン・ドートンヌやフランス画家・版画家協会に所属して創作活動し、パリの画壇で高く評価された。現在は、日本でも版画史上きわめて重要な作家として位置づけられている。

本展は、国際版画美術館で収蔵する長谷川の作品と、長谷川が影響を受けた西洋の画家などの関連作品を合わせ約165点を展示、次のとおり全６章とコラム６コーナーで展示構成した。「第Ⅰ章　日本時代　文芸雑誌『仮面』の画家　1913-1918」「第Ⅱ章　フランスで銅版画家として立つ　1919-1941」「第Ⅲ章　仏訳『竹取物語』1934（1933）」「第Ⅳ章　日常にひそむ神秘　1941-1950年代末」「第Ⅴ章　精神の高みへ　「マニエール・ノワール」の静物画　1950年代末～1969」「第Ⅵ章　エピローグ」の全６章。「コラム１　『仮面』および日本版画倶楽部の版画仲間」「コラム２　萩原朔太郎詩集『月に吠える』への共感」「コラム３　青年時代の刺激」「コラム４　エングレーヴィングという超絶技巧」「コラム５　メゾチント技法の作品を比較する」「コラム６　フランスの友人画家」の６つのコラム。

イベントとして、長谷川潔研究の第一人者である猿渡紀代子氏（大佛次郎記念館特任研究員、元横浜美術館学芸員）の講演会を開催した。また、夏休みの期間中に、普及係により、子どもから大人までを対象者としたレース模様の図柄を刷る創作体験「レース×プレス機でつくる版画」を実施した（講師は版画家の常田泰由氏）。そのほか、桜美林大学と玉川大学の学生による演奏会をプロムナード・コンサートとして開催し、担当学芸員によるギャラリートークを全４回実施した。

主催：町田市立国際版画美術館

印刷物：出品リスト／小中学生用鑑賞ワークシート「長谷川潔の版画をたんさく」（無料配布）

関連行事	開催日　参加者総数	396人
◆講演会「銅版画家・長谷川潔―日本とフランスでの生涯と作品」 講師：猿渡紀代子氏（大佛次郎記念館特任研究員）	７月30日（土）	47人
◆普及係：版画体験イベント「レース×プレス機でつくる版画」 講師：常田泰由氏（版画家）	８月６（土）、７日（日）	108人
◆プロムナード・コンサート「版画の神秘・音の神秘」 出演：桜美林大学芸術文化学群、玉川大学芸術学部	９月10日（土）	138人
◆ギャラリートーク 担当学芸員・滝沢恭司	7/17、8/21、9/4、18（日）	103人

「版画×写真 1839-1900」 2022年10月18日（土）～12月11日（日）	56日間 総入場者数	5,687人

19世紀に発明された写真は、産業や文化、あらゆる面において世界を大きく変えた。写真以前にイメージを写し伝える役割を担っていたのは版画であり、その登場は版画にとって重要なターニングポイントとなった。

19世紀の版画と写真の関係は、新技術である写真に実用面で版画が「駆逐」されるという結果ばかりが取り上げられてきた。しかし細かく追っていくと、初期写真の技術的に不十分な部分を版画が補ったり、現実を見たままに記録できるという最大の長所を犠牲にしてまでも、写真が版画や美術の表現を取り入れようと試みたりといった、試行錯誤の跡が見えてくる。本展は版画の視点から見た初期写真史であるとともに、「腐蝕銅版画家協会」や「版画の冒険」といった19世紀の版画革新運動を取り上げたこれまで当館で開催してきた展覧会と関連する内容となっている。

ヨーロッパを中心に、版画と写真作品に加え、カメラや撮影機材などの関連資料180点を展示した。充実したカメラコレクションで知られる横浜市民ギャラリーあざみ野の特別協力を受け、カメラや写真機材などを多数出品できたことで立体的な展示が可能となった。借用先は首都圏に限られたが、充実したコレクションを所蔵する各機関の多大な協力により重要かつ必要な作品を揃えることができた。当館ではこれまで大きく扱うことがなかった写真をテーマに取り上げたことで、新たな客層にアピールすることができた。

主催：町田市立国際版画美術館　特別協力：横浜市民ギャラリーあざみ野

助成：公益財団法人朝日新聞文化財団

印刷物：図録（B5変型、全200頁）、チラシ、ポスター、DM

図録執筆者：三井圭司（公益財団法人東京都歴史文化財団学芸員）、大森弦史（東京工芸大学准教授） 日比谷安希子（横浜市民ギャラリーあざみ野学芸員）、和南城愛理、高野詩織、川添愛奈		
関連行事	参加者総数	367人
◆講演会「19世紀の写真技術～発明から普及まで～」　講師：三井圭司	11月５日（土）	35人
◆公開制作「写真から版画へ」　講師：藤田修（版画家）	11月26日（土）	79人
◆ゆうゆうはんがまつりイベント「大事な写真をケースに入れよう」 担当学芸員・和南城愛理、高野詩織、川添愛奈	10月22日（土）	60人
◆プロムナード・コンサート「2×2＝4Hands　４つの手で奏でる音色の世界」 出演：カノンデュオシスターズ（ピアノ）嘉村えりか、嘉村ゆりえ	11月12日（土）	146人
◆担当学芸員によるギャラリートーク　担当学芸員・和南城愛理、高野詩織	10月29日（土） 11月20日（日）	47人

「2022年度新収蔵作品展　Present for you」 2022年12月22日（木）～2023年２月19日（日）	45日間 総入場者数	20,324人
2021年度から2022年度にかけて新たに収蔵された216点のなかから、主な作品・資料約100点を展示。主な出品作家は、川瀬巴水（1883-1957）、草間彌生（1929年生まれ）、黒崎彰（1937-2019）など。		
主催：町田市立国際版画美術館		
印刷物：出品目録（庁内印刷）		

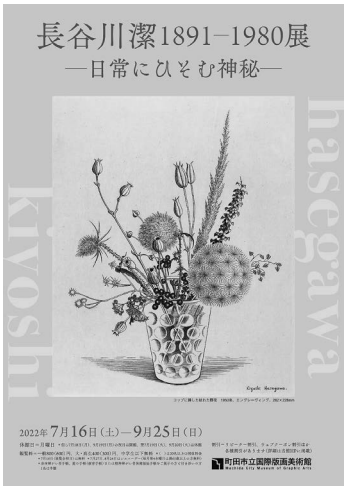
【常設展示室（収蔵品による特集展示）】　印刷物：出品目録（庁内印刷）

第１期　紙上の静物たち 2022年４月13日（水）～７月10日（日）	77日間 総入場者数	8,228人
花や果物などを対象とする一般的な静物画だけではなく、器物の装飾デザインとして作られた版画、作者の手やまなざしによって物言わぬモノが語りだすかのような存在感をもつ作品など、約40点を展覧した。		
第２期　文明開化の子どもたち―浮世絵に描かれた遊びと学び 2022年７月13日（水）～９月25日（日）	65日間 総入場者数	7,228人
フランス・パリで開催された「文明開化の子どもたち」展（国際交流基金パリ日本文化会館　会期：2022年３月30日～５月21日）の凱旋展。約80点の子ども絵や教育錦絵、おもちゃ絵を前後期で展観した。		
第３期　内海柳子とデモクラートの作家たち 2022年９月28日（水）～12月18日（日）	71日間 総入場者数	6,031人
デモクラート美術家協会に加わり、パリのアトリエ17でも学んだ内海柳子（1921-2023）の作品24点と、デモクラート美術家協会メンバーだった瑛九、泉茂、吉原英雄の作品、計32点を展示した。		
第４期　パリのモダン・ライフ―1900年の版画、雑誌、ポスター 2023年12月22日（水）～３月12日（日）	63日間 総入場者数	22,611人
アルフォンス・ミュシャ（1860-1939）のリトグラフ、ジャン=エミール・ラブルール（1877-1943）のエングレーヴィングなど、19世紀末から20世紀前半にかけてパリのモダン・ライフを彩った版画、雑誌、ポスター約40点を展示した。		

「彫刻刀が刻む戦後日本―２つの民衆版画運動」

チラシ

「長谷川潔 1891-1980展　―日常にひそむ神秘―」



チラシ

「版画×写真 1839-1900」

チラシ

2022年度　収蔵品貸出記録

ミロ展―日本を夢みて Bunkamura ザ・ミュージアム［2022年２月11日～４月17日］ 愛知県美術館［2022年４月29日～７月３日］ 富山県美術館［2022年７月16日～９月４日］		
1	ジュアン・ミロ	マキモノ

日本の中のマネ 練馬区立美術館［2022年９月４日～11月３日］		
1	エドゥアール・マネ	スペインの歌手、ギタレロ
2	エドゥアール・マネ	ジプシー（『腐蝕銅版画協会集』第４図）
3	エドゥアール・マネ	ローラ・ド・ヴァランス（『腐蝕銅版画協会集』第67図）
4	エドゥアール・マネ	猫と花
5	エドゥアール・マネ	帽子を被ったボードレールの肖像Ⅱ

理想の書物―英国19世紀挿絵本からプライヴェート・プレスの世界へ 群馬県立近代美術館［2023年９月17日～11月13日］		
1	トマス・ストザード	エドワード・ヤング著『夜想』
2	ウィリアム・ブレイク	エドワード・ヤング著『夜想』
3	トマス・ビューイック	『四足獣概説』
4	トマス・ビューイック	『英国鳥類誌２巻』
5	トマス・ビューイック	『イソップ寓話』
6	エレノア・ヴィア・ボイル	サラ・オースティン著『終わりのない物語』
7	ウォルター・クレイン	『ウォルター・クレインの絵本　ハバードおばさんの絵本　第２巻』
8	ローレンス・ハウスマン	クリスティナ・ロセッティ著『ゴブリン・マーケット』
9	ローレンス・ハウスマン	ジェーン・バーロー著『妖精の国の最期』
10	ランドルフ・コルデコット	『えっさかほいさ・赤ちゃんのおくるみ』
11	トマス・ビューイック	雄ジカ、またはレッド・ディア
12	トマス・ビューイック	雑種のキツネ
13	トマス・ビューイック	ヴィニェット（旅芸人）
14	トマス・ビューイック	ヴィニェット（羊をねらうキツネ）
15	トマス・ビューイック	鵜
16	トマス・ビューイック	カワセミ
17	トマス・ビューイック	ヴィニェット（洗濯物を干す農婦）
18	トマス・ビューイック	ヴィニェット（墓石に馬乗りになって遊ぶ子どもたち）

鉄道と美術の150年 東京ステーションギャラリー［2022年10月８日～2023年１月９日］		
1	小林清親	高輪内町朧月夜
2	小林清親	新橋ステンション
3	野村芳国（二代）	京坂名所図会の内　大阪梅田ステンシヨン汽車之図

マン・レイのオブジェ 日々是好物｜いとしきものたち DIC川村記念美術館［2022年10月８日～2023年１月15日］		
1	マックス・エルンスト	ルネ・クルヴェル著『ナイフ氏とフォーク嬢』
2	マン・レイ	『回転扉』　道化
3	マン・レイ	『回転扉』　長距離
4	マン・レイ	『回転扉』　オーケストラ
5	マン・レイ	『回転扉』　会議
6	マン・レイ	『回転扉』　伝説
7	マン・レイ	『回転扉』　デカンタ
8	マン・レイ	『回転扉』　若い娘
9	マン・レイ	『回転扉』　影
10	マン・レイ	『回転扉』　コンクリート・ミキサー
11	マン・レイ	『回転扉』　トンボ

桃源郷通行許可証 埼玉県立近代美術館［2022年10月22日～2023年１月29日］		
1	アントニオ・ダ・トレント	聖ペテロとパウロの殉教
2	コレッジョ（原画）	聖カタリナの神秘の婚姻

没後200年　亜欧堂田善　江戸の洋風画家・創造の軌跡 福島県立美術館［2022年10月29日～12月18日］ 千葉市美術館［2023年１月13日～２月26日］		
1	ヤン・ライケン（著・画）	『職業図鑑』
2	亜欧堂田善	飛鳥山眺望
3	三代歌川豊国（画）	『釈迦八相倭文庫』初編（上）・（下）
4	歌川国芳（画）	『七組入子枕』三編（上）・（下）
5	油井夫山	『日本銅判画創製　亜欧堂田善』
6	松田緑山	東都十景

没後35年　清原啓子銅版画展 佐倉市立美術館［2022年11月１日～12月８日］		
1	清原啓子	失題

憧憬の地 ブルターニュ 国立西洋美術館［2023年３月18日～６月11日］		
『腐蝕銅版画家協会集』より		
1	アルマン・ケイロワ	メネクのメンヒル
2	レオン・ゴーシュレル	ロク・マリアカールのドルメン（ブルターニュ）
3	ヴェーバー	ブルターニュのパルドンの祭り（ル・ファウエ近郊、モービアン）
4	ザレスキ	シャトーブリアンの墓（サン＝マロ）
5	ベヌ	トレメルクの村（ブルターニュ）

6	オーギュスト・フェアン＝ペラン	汽船を待つバッツ島の女たち
『イリュストラシオン・ヌーヴェル』より		
7	ウジェーヌ・マルタン	ブルターニュの酒場（ポン＝タヴェンの思い出）
8	フランソワ＝ジャック＝マリー・デタップ	ウェサン島の海戦後、ブレストの錨地で修理される三層甲板艦ルイ15世、1779年
9	アルマン・ケイロワ	ケルヴァレの古い風車
10	アルマン・ケイロワ	バッツ島の町にて
11	マキシム・ラランヌ	エヌボンの眺め（モルビアン）
12	マキシム・ラランヌ	コンカルノーにて
13	マルセラン・ド・グロワゼイエ	コンケの港（フィニステール）
14	フランソワ・ボンヴァン	糸を紡ぐブルターニュ女性
『エスタンプ・モデルヌ』より		
15	エミール・オーギュスト・ウェリー	ブルターニュ
16	ジャック・ウェリー	荒野の花
17	マクシミリアンヌ・ギュイヨン	海の星（聖母マリア）
18	ラウル・アンドレ・ウルマン	かなしみの海
19	アンリ・リヴィエール	フレネーの入り江

2022年度　普及事業　　2022年４月～2023年３月

1　版画講座

版画工房・アトリエにて開催される版画の講習会。様々な種類の版画を体験することができます。制作を通して版画の理解を深め、創作の楽しさを味わうことを目的にしています。子どもを対象にした講座では、版画美術館ならではの楽しい制作体験ができるよう工夫を重ねています。

	事業名	対象	概　要	実施日程	定員	のべ参加人数	うち小中学生	参加費	備考
1	銅版画一日教室①	一般 ※高校生以上	銅版画の基本的な制作を一日で体験する。初心者から参加可。12×16㎝の銅板を用い、ドライポイント技法で作品を制作。下絵は各受講生が持参。様々な方法で版に描きこむことにより深みのある作品作りを目指す。 講師：馬場知子(版画家)	6/3(金) 10:30～16:00	10人	9人	—	3,000円	感染症対策のため定員減(14人→10人)
2	銅版画一日教室②			6/4(土) 10:30～16:00	10人	10人	—		
3	リトグラフ一日教室①		各自用意した下絵をもとに、単色のリトグラフ作品を制作する。受講生は講師のアドバイスを受けつつ、様々な描画材を使ってアルミ版に描き込むことで、リトグラフならではの表現を体験する。初心者から参加可。感染症対策の為、講義・描画はアトリエで実施。 講師：小森琢巳(版画家)	9/2(金) 11:00～16:00	8人	8人	—		感染症対策のため版画工房とアトリエの両室で実施
4	リトグラフ一日教室②			9/3(土) 11:00～16:00	8人	8人	—		
5	創作講座　銅版画 版の痕跡を思考する		エッチングとアクアチントを中心に、銅版画の基本的な制作プロセスから雁皮刷りなどの応用技法までを学ぶ。制作点数は2点。講師には受講生それぞれが目指す絵作りに沿った指導をしていただいた。9回目に本刷りを行い、10回目は1人ずつ自作を前に感想を話し、それに対して講師がアドバイスする鑑賞会を行った。 講師：濱田富貴(銅版画家)	9/14～11/16 水曜10回 13:30～16:30	14人	128人	—	30,000円	感染症縮小傾向に伴い定員増(8人→14人)
6	木版画一日教室①		彫刻刀やバレンの持ち方から、絵具の溶き方、刷毛の使い方まで、木版画の基本的な制作を一日で体験する。初心者から参加可。単色または2色摺りの年賀状を制作。下絵は講師が複数用意し、好きなものを選ぶ。彫りから摺りまで、ハガキ30枚程度を制作する。 講師：木下泰嘉(木版画家)	12/6(火) 10:30～16:00	16人	15人	—	3,000円	感染症縮小傾向に伴い、会場を市民展示室からアトリエへ変更。および定員増(15人→16人)
7	木版画一日教室②			12/7(水) 10:30～16:00	16人	15人			
8	子ども講座① -みてみてつくろう- 昭和にタイムトラベル！ ガリ版にチャレンジ	小学3～6年生	企画展「彫刻刀が刻む戦後日本―２つの民衆版画運動」展の作品鑑賞と、昭和に活躍した印刷技法・ガリ版(謄写版)の制作体験を行う。 子どもの大型版画作品および版画集を学芸係学芸員の解説で鑑賞したのち、「平和」というテーマで謄写版による作品を各自制作。最後に自作について一人ずつ発表。ボランティアのまちだサポーターズは鑑賞中の子どもの見守りや制作補助の他、展示作品やガリ版にまつわる昭和の思い出を語ってもらった。感染症対策のためスペースがとれる講堂で実施。 講師：杉浦幸子(武蔵野美術大学芸術文化学科教授) 制作指導：当館学芸員	5/7(土) 13:30～16:00	16人	16人	16人	1,000円	感染症対策のため会場変更(アトリエ→講堂)
9	夏期子ども講座 宇宙人のウキウキ夏休み ～いろいろな材料で版画を作ってみよう！～①		東京学芸大学の学生ボランティア16人と指導教官が企画・指導をおこなう。講座はアトリエで行い、「宇宙人は夏休みに何をしているの？」というテーマで想像の世界を板紙を使用したコラグラフで表現した。受講生それぞれが事前に「どんな宇宙人が、どんな夏休みを楽しんでいるか」をワークシートに記載し、下絵を作成して持参。当日はそれをもとに宇宙人の版と背景の版を制作し、ローラーで自由に色彩をつけ、背景の版に宇宙人の版を重ねた上に紙を置き、バレンで摺った。講座終了後、子どもたちの作品と指導にあたった学生の版画作品を市民展示室で展示した。 講師：清野泰之(東京学芸大学芸術・スポーツ科学系教授)	7/30(土) 12:30～16:00	16人	12人	12人		感染症対策のため活動時間を短縮(全日→午後のみ)
10	夏期子ども講座 宇宙人のウキウキ夏休み ～いろいろな材料で版画を作ってみよう！～②			7/31(日) 12:30～16:00	16人	13人	13人		
11	子ども講座② -みてみてつくろう- 自然の絵本をつくる		企画展「自然という書物」を学芸係学芸員の解説で鑑賞したのち、薄紙に色鉛筆を使ったフロッタージュをし、それを小さな本にする。フロッタージュの素材はあらかじめ芹ヶ谷公園で集めておいた落葉や枝の中から受講生が選んだ。最後に自作について一人ずつ発表。ボランティアのまちだサポーターズは鑑賞中の子どもの見守りや制作補助を行う。感染症対策のためスペースがとれる講堂で実施。 講師：杉浦幸子(武蔵野美術大学芸術文化学科教授) 制作指導：当館学芸員	2023年3/25 (土) 13:30～16:00	16人	15人	15人		感染症縮小傾向に伴い、マスクの着用を任意に変更

2　学校教育への協力

町田市内の学校を中心に、美術部の体験学習や学校単位での団体鑑賞、出張授業などをおこなっています。
版画技法について教員からの問い合わせに答えたり、教員研修会への講師紹介・道具の貸出しなどもおこなっています。

	事業名	対象	概　要	実施日程	定員	のべ参加人数	うち小中学生	参加費	備考
1	版画講座	中学、高校の美術部など	東京都立小川高等学校美術部9名(1年生)が参加。学芸員の指導により銅版画(メゾチント)の作品を制作。開催中の長谷川潔展においても鑑賞を行い、メゾチントの表現の特徴などを学ぶ。	8/19(金) 10:15～16:30	9人	9人	—	1,000円	
2	教員研修会等への協力	町田市内の小中学校など	町田市小学校教育研究会図工部夏季(実技)研修会開催にあたり、講師の紹介、内容・進行に対する助言、会場利用に関する調整等を実施。 【研修会内容： 講師・杉浦幸子氏による鑑賞学習の指導方法についてのレクチャー、および常設展示室でのグループワーク】	8/26(金) 10:00～12:00	21人	21人	—	無料	
3	リトグラフ実習	東京学芸大学教育学部美術講座の学生	アルミ版によるリトグラフの基本的な制作方法を学ぶ。1版単色刷(色インク)にベタ版を加えた2色刷りを制作する。	2023年 2/21(火) 3/1(水) 10:15～16:00	9人	18人	—	3,000円	

3　作品展

講座で制作した作品による作品展を、館内の市民展示室等で開催します。作品を展示する機会を受講生に提供し、
「発表する楽しさ」を経験してもらうことを目的としています。
町田市公立小中学校作品展では、美術館を会場とし美術館職員がかかわることで、より質の高い展示を目指しています。

	事業名	対象	概　要	会　期	出品状況	来場者数	うち小中学生	観覧料	備考
1	講座受講生作品展 私たちのステップ・ワン 版画講座受講生と講師による展覧会	どなたでも	2021年度創作講座(長期講座)スクリーンプリントの受講生と講師による作品展。講座中および講座修了後に制作した作品14点のほか、スクリーンプリントの制作工程の解説や道具類を展示した。 会場：市民展示室	5/25(水) ～ 5/29(日)	受講生6人 (12点) 講師1人 (2点)	217人	11人(推定)	無料	
2	夏期子ども講座作品展 宇宙人のウキウキ夏休み展		夏期子ども講座(38頁参照)の受講生と、指導をおこなった東京学芸大学の学生による作品展。講座で制作した版画のほか、各自がアイデアを記したワークシート、制作についての感想文も展示した。また、制作の様子を工程順に編集したビデオを上映。会場中央には刷り終えた紙版を利用した「巨大モビール」を設置した。 展示会場：市民展示室	8/9(火)～13(土)	受講生25人 (25点) 大学生11人 (12点)	259人	44人		
3	第36回 町田市公立小中学校作品展		町田市内の公立小中学校の児童・生徒による作品展。子どもたちが学校で学習した美術、図画工作、書写の意欲溢れる作品を展示する。 〈参加校〉町田市立小学校および中学校 〈出品作品〉上記学校の授業等で児童・生徒が作った水彩画、版画、デザイン、ポスターなどの平面作品ならびに中学生による工芸、彫刻などの立体作品。および小学生の書写作品。 〈会場〉企画展示室1 〈主催〉町田市、町田市教育委員会、 町田市公立小学校教育研究会図工部・国語部 町田市中学校教育研究会・美術部	中学校美術作品展 2023年 1/13(金)～22(日) 〈9日間〉	20校 平面2,238点 立体798点	5,220人	1,414人		小中学校 作品展合計 出品点数 7,913点 来場者数 15,387人 うち小中学生 5,175人
				小学校図画工作展 1/27(金)～2/5(日) 〈9日間〉	42校 平面1,534点	7,827人	3,035人		
				小学校書写展 2/10(金)～2/19(日) 〈9日間〉	42校 3,405点	2,340人	726人		

4　イベント、コンサート

気軽に参加できるさまざまなイベントを実施することで、より身近な美術館となるよう努めます。

	事業名	対象	概　要	実施日程	定員	参加者数 入場者数	うち小中学生	参加費	備考
1	版画体験イベント① レース×プレス機でつくる 版画	どなたでも	「長谷川潔1891-1980展　日常にひそむ神秘」関連催事 レースを使った作品を多く遺した長谷川にちなみ、レースのパーツを花のモチーフとしてレイアウトした版画(コラグラフ)を制作。レースを並べた紙版を載せて一度プレス機を通したベタ版を版にすることで、レースが長谷川の作品のように白く表現される。 講師：常田泰由(版画家)　制作時間：約25分　会場：アトリエ	8/6(土) 10:00～16:20	48人	46人	24人 (未就学児含む)	500円	
2	版画体験イベント② レース×プレス機でつくる 版画			8/7(日) 10:00～16:20	48人	49人	27人 (未就学児含む)		
3	作家招へい事業 公開制作−写真から版画へ−	小学生以上	「版画×写真1839-1900」関連催事 フォトエッチング(感光性乳剤を塗った銅版による写真製版)と、フォトポリマーグラヴュール(感光性樹脂版による写真製版)で作品を制作する藤田修氏を招へいした。自身の作品紹介を通して、その制作の視点と技法についてお話しいただいた後、フォトポリマーグラヴュールの雁皮刷りを実演していただいた。	11/26(土) 13:30～15:00	60人(入退室自由)	74人	0人	無料	
4	版画体験イベント③ 版を重ねてつくる、 水彩モノタイプ	どなたでも	「パリのモダン・ライフ—1900年の版画、雑誌、ポスター」関連催事 ミニ企画展の色彩豊かな作品にちなみ、水彩モノタイプ(水彩絵の具を使ったモノタイプ技法)で3版多色刷りの作品を制作する。事前申込制(先着順)。参加者には事前にミニ企画展(無料)の鑑賞を促す。 講師：常田泰由(版画家)　制作時間：約50分　会場：アトリエ	2023年 2/18(土) 10:00～16:00	48人	48人	23人	500円	
5	プロムナード・コンサートI うたごえ喫茶で甦る青春	どなたでも	「彫刻刀が刻む戦後日本—2つの民衆版画運動」展関連催事 奥村浩樹(テノール)、鵜戸西到(ピアノ) イタリア歌曲、オペラアリアのほか、「上を向いて歩こう」「見上げてごらん夜の星を」など	6/19(日) ①13:00 ②15:00 各回30分	①70人 ②70人	①60人 ②70人	5人	無料	
6	プロムナード・コンサート Ⅱ 版画の神秘・音の神秘		「長谷川潔1891-1980展　日常にひそむ神秘」関連催事 ①桜美林大学芸術文化学群　②玉川大学芸術学部 町田市内の大学で音楽を学ぶ学生による声楽、器楽	9/10(土) ①13:00 ②15:00 各回30分	①70人 ②70人	①69人 ②69人	5人		
7	プロムナード・コンサート Ⅲ 2×2=4Hands ピアノデュオ 4つの手で奏でる 音色の世界		「版画×写真1839-1900」展関連催事 カノンデュオシスターズ〈嘉村えりか、嘉村ゆりえ〉(ピアノデュオ) ムソルグスキー「～展覧会の絵～よりキーウの大門」、エルガー「威風堂々」　ほか	11/12(土) ①13:00 ②15:00 各回30分	①75人 ②75人	①77人 ②69人	6人		
8	プロムナード・コンサート Ⅳ あなたに贈る至宝のピアノ・ ベーゼンドルファーの響き		「新収蔵作品展」および「第36回町田市公立小中学校作品」関連催事 富岡紀香(ピアノ) モーツァルト「幻想曲ハ短調kv475」、ベートーヴェン「ピアノソナタ第9番op14-1,第1楽章」　ほか	2023年 2/19(日) ①13:00 ②15:00 各回30分	①74人 ②74人	①98人 ②100人 立ち見含む	①6人 ②7人		

5　版画工房・アトリエの一般開放

	事業名	対象	概　要	実施日程	定員	参加人数	使用料	備考
1	版画工房・アトリエの一般開放	版画制作経験者	版画工房とアトリエを開放し、創作の場を市民に広く提供。各種プレス機、腐蝕施設、ローラー等の備品のほかインクなどが使用できる。 毎週木曜、日曜、月2回の火曜に実施。9時30分～17時30分(9時30分～13時30分と13時30分～17時30分)	年間 123回実施 4/1～5/31(21回) 通常定員の70%で実施 6/1～2023年3/31(102回) 通常定員で実施	木版画　2人 スクリーンプリント　8人 リトグラフ　6人 銅版画　10人	計4,114人 木版画　288人 スクリーンプリント　1,043人 リトグラフ　841人 銅版画　1,942人	半日：1,250円 一日：2,500円	4/1～5/31(21回) 通常定員の70%で実施 定員 銅版画　7人 リトグラフ　5人 スクリーンプリント　5人 木版画　2人

6　その他事業

	事業名	対象	概　要	実施日程	定員	来場者数	参加費	備考
1	第24回　ゆうゆう版画美術館まつり	どなたでも	友の会との共催事業。国際版画美術館を拠点に町田市内外に“美術を愛する人々の交流の輪”を拡げることを目的とする。チャリティアートショップ、コンサート、子供向けワークショップなど館内でさまざまなイベントを実施。町田時代祭り(10月23日)、文学館まつり(10月23日)、生涯学習センターまつり(10月22、23日)と同時期に開催。	10/22(土)、23(日)	―	5,007人	無料	

1　版画講座

銅版画一日教室

リトグラフ一日教室

木版画一日教室

創作講座 銅版画

子ども講座①―みてみてつくろう―「昭和にタイムトラベル！ガリ版にチャレンジ」

子ども講座②―みてみてつくろう―「自然の絵本をつくる」

夏期子ども講座「宇宙人のウキウキ夏休み」

2　学校教育への協力

版画講座（東京都立小川高等学校美術部）

リトグラフ実習（東京学芸大学）

町田市小学校教育研究会図工部夏季研修会

３　作品展

講座受講生作品展

夏期子ども講座作品展

第36回　町田市公立小中学校作品展

中学校美術作品展

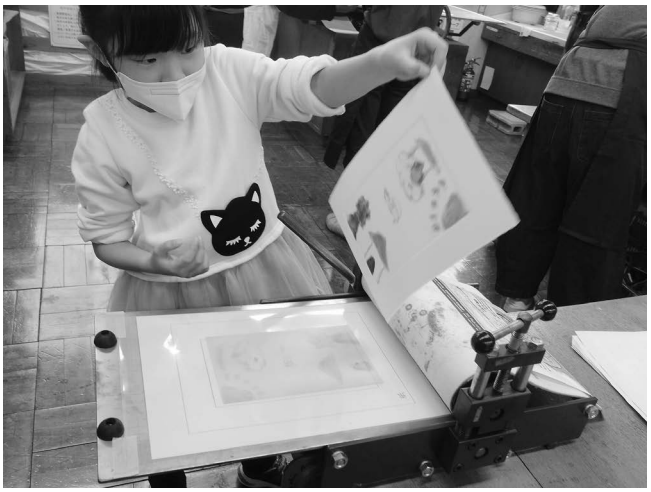
小学校図画工作展

小学校書写展

4　イベント、コンサート

作家招へい事業「公開制作―写真から版画へ―」

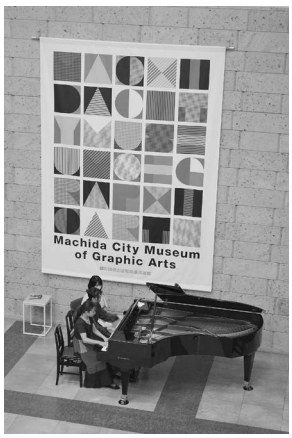
版画体験イベント①②「レース×プレス機でつくる版画」



版画体験イベント③「版を重ねてつくる、水彩モノタイプ」

プロムナード・コンサート

「うたごえ喫茶で甦る青春」



「版画の神秘・音の神秘」

「2×2＝4Hands　ピアノデュオ　4つの手で奏でる音色の世界」

「あなたに贈る至宝のピアノ・ベーゼンドルファーの響き」

第24回ゆうゆう版画美術館まつり

5　版画工房・アトリエの一般開放

アトリエ

版画工房

町田市立国際版画美術館 紀要　第27号

2024年３月29日　発行
編集・発行　町田市立国際版画美術館
〒194-0013　東京都町田市原町田4-28-1
℡：042-726-2771／0860
刊行物番号　23-57
製作　ニューカラー写真印刷株式会社

Machida City Museum of Graphic Arts
Haramachida 4-28-1
Machida City, Tokyo, Japan 194-0013

Edited and Published by Machida City Museum of Graphic Arts
Printed by New Color Photographic Printing co., ltd.